

Fate/Nilotpalgita Synopsis

時雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、某プロジェクトの如く事故に遭い死んでしまった女子高生は気がつくや赤子になっていた。自分が転生したことに気づいた彼女は愕然とするが、事実を受け入れて生きていこうとする。

しかし、あらゆる困難に見舞われる彼女。見知らぬ森で途方に暮れていると、とある人物と逢う。

それがきっかけで、彼女は運命と邂逅する。彼女は自分に降りかかる困難に打ち勝つことができるのだろうか？

——そんな彼女の人生のお話。

初めまして。時雨と申します。

二次小説を書くのは今回がはじめてです。

誤字・脱字がありましたら、是非報告をして下さい。

読者の皆様楽しんでいただけたら幸いです。

ご意見、ご感想、お待ちしています。

ちなみに、更新は気まぐれです。のんびりと待っていてくれると嬉しいです。

※なお、作者の心は豆腐メンタルです。批判のコメントなどを書き込む場合はお手柔らかにお願いします……。アンチ・ヘイトタグは念

のためです。

※チマチマと話を手直ししているところもあるので、あしからず。

・お知らせ

近々、大幅に内容を書き直す（かも）しれません。

目次

序章	
プロローグ	1
1章 ある日、森の昼下がりにて	
湖の畔	3
見知らぬ天井	6
斧を持った男と少女	10
2章 両雄との邂逅	
数年後、ある日の会話	16
波乱の競技会	19
邪心と太陽と	25
雷帝と正法と	32
3章 王族の花	
カリ・ユガの陰謀	42
嵐前の静けさ	45
絢爛なる花婿選び	51
続・絢爛なる花婿選び	56
続々・絢爛なる花婿選び	63
4章 少女の受難	
海底に潜む竜の悩み事	68
水底の乙女との鬼ごっこ	72

序章 プロローグ

今日は、いつも通りの何の変哲もない日だった。学校に行って、授業を受けて、クラスメイト友人と話して……。

本当に、いつも通りの、つまらない日だった。

別に、今の現状に不満はない。平和なことはよいことだと思っし、何か事件事故に巻き込まれて大変なことになるよりはよっぽどましだろう。

まあ、何か面白いことが一つや二つ起こってもいいんじゃないかとは常々思っていたりするのだが。

それはともかく。私は今、不本意なことに親から買い物を頼まれてしまったので、仕方なくいつもお世話になっているスーパーに向かっていた。

夕方ということもあり、帰宅途中の学生やサラリーマン、私と同じくスーパーに向かっている主婦などが歩いているのがちらほら見える。今頃、買い物を頼まれていなかったら家でのんびりしながらゲームができたのに……。

面倒だなあ、と思っていたそのとき。

——ガラツ

と、何処かから音がした。

何だろう？ 周りの人が上をしきりに青ざめた顔で指差している。不思議に思っ、私も上を向いてみると——

——吊り下げられていた鉄柱が、自分に向かって落ちてきていた。

「えっ」

私は一瞬、頭が真っ白になった。落ちてくる鉄柱が、まるでスロームーシヨンのようにゆっくりと動いて見える。

「おい、早く逃げろ!!」

誰かが、そう叫んだ。逃げなければいけないのは頭では理解しているが、体がその場に縛りつけられたかのように固まって動かない。必

死に体を動かそうとしているが、相変わらず指の一本も動いてくれず、悲鳴をあげたくても、口が開いてくれない。周りの人たちは「早く逃げろ」と遠くで騒いでいる。正直言つて、五月蠅い。こっちは逃げたくても逃げられないんだってば。

そして、ついに。

——ドシュツ

何ともいえない鈍い音が、五月蠅かったこの場所に響く。自分の全身に激痛が走り、口から真っ赤な血が吐き出され、コンクリートの地面に真紅の花を咲かせた。そのとたん、女性の耳を劈かんばかりの悲鳴が先ほどとは打って変わり、静まり返った空間に響き渡る。

どうやら鉄柱は、私の体を貫いてコンクリートの地面に突き刺さっているらしい。実際、激痛に襲われている最中だが、微かに自分の体が浮いているのが分かる。簡単に言うと、串刺し状態になっている。

……なんだか某プロジェクトのようだ。いや、普通はトラックが主流なのだろうけれど。ちなみに、こうして呑気に考えているが、体は滅茶苦茶痛いし、口の中は血塗れで気持ち悪いし、周りは五月蠅いし、目が霞んでくるしでいろいろとまずい状態だ。遠くで、救急車のサイレンの音が聞こえるが、それもだんだんと聞こえなくなっていく。

(ああ、これ、死ぬのかなあ。)

ふと、私はとあるゲームを思い出す。

久しぶりにハマってプレイしていた、あのゲーム。まだ全部クリアしていないが、世界観がとても好きだった。

(生きてたら、また、やりたいな。)

視界が、黒く染まる。その思いを最後に私は、意識を手放した。深い、深い、闇の中へと。

——おやすみなさい。よい夢を。

音が無い世界で、誰かがそう、呟いたような気がした。

1章 ある日、森の昼下がりにて 湖の畔

何がどうして、こうなったのか。自分でもよく覚えていない。ただ、解わからっていることは……。

——自分が転生した、ということ。

——これから、一人で生きなければならない。ということだ。

私は今、一人ポツリと鬱蒼とした森の湖の畔ほとりに座っている。人という生き物は不思議なもので、死んだと思つたら赤ん坊になつていたり、自分の生まれ落ちた世界が「剣と魔法のファンタジー」のような世界観で、しかも古代インドだとしても、年月が経つにつれて見事に適応してしまうらしい。

喩たとえ、いきなり現れた女神から加護をもらった数週間後にこの世界の両親と死に別れてしまった上に、そのことが原因で他の人に忌諱きげんされ、この見知らぬ森で生活することになったとしても。

……うん。本当に、何でこうなつたんだろう。

この森で生活すること早一週間。食べれそうな木の実や野草を採取しつつ、仲良くなった動物たちと協力して、ここまで食い繋いできた。サバイバル知識がろくにない素人がよく一週間も生きていられたな、とつくづく思う。

しかも、今の私は五歳くらいの子どもだ。本当に今日まで生きていられたことが、不思議で仕方がない。……まあ、推測でしかないが、恐らく「彼女」がくれた加護のおかげなのだろうけれど。

閑話休題それほともかく。

今日も今日とて食料を探さなければいけないのだが、何故かやる気がでない。いや、冗談抜きで本当に。なのでこうして、湖の畔に座つてただボーツと空を見上げている。傍目からみたら、ただの不審者に見えないだろう。

「綺麗だなあ」

思わず、そう呟く。数時間前から見上げている空は、青く透き

通っており、雲一つ無いまさに晴天霹靂の空だった。

そうしてしばらくの間、現実逃避をしていると背後からガサガサと草が揺れる音がした。私は仲の良い動物たちの内の誰かかな、と気にせず——後ろを振り向くこともなく——また、じっと空を見上げる。が、そろそろ飽きてきたし、いい加減に食料を探しに行かなければならないので、立ち上がってその場を去ろうとした。

そのとき。

「おい、お前。そこで何をしている」

後ろからいきなりしわがれた低い男の声が聞こえてきた。どうやら、先ほどの音は動物たちではなく、この声の主が草むらを踏み分けてきたときの音だったらしい。

久しぶりに人の声を聞いたが、本当に人なのだろうか。もしかしたら、ただの幻聴かもしれない。恐る恐る後ろを振り返ってみると、そこには背に巨大な戦斧を背負った、一人の壮年の男が立っていた。

子どもがこんなところにいるのを不審に思っているのか、怪訝な顔つきをしている。

「何って、ただ空を見上げていただけです」

「何で空を見上げていたんだ」

「現実逃避をしていたから？」

現実逃避？と首を傾げながらオウム返しのように言う彼。この世界にこの言葉が存在するのかは別として、それ以外の言葉が思い付かなかったのだからしょうがない。

自分のボキャブラリーの少なさを実感していると、彼は鋭い目付きでこちらを見て、ゆっくりと口を開いた。

「現実逃避はよく分からんが、こんな鬱蒼とした森に一人でいるのは危ないだろう。親はどうした」

親。その言葉を聞いたとたん、ドクリと私の心臓が歪な音を立てる。

自分の脳裏に浮かんだのは、元気な姿で笑っている両親の姿と

……。

血に染まって、息絶えた、二人の――。

ヒュツ、と短く息を吸う。深呼吸をしようとしたつもりが、それができずどんどん呼吸が浅くなり息苦しくなっていく。

「大丈夫か?!」

誰かが、私に駆け寄ってくる。返事をしようとするが、上手く喋ることができない。意識が、朦朧としてきてろくに頭も回らない……前にも似たようなことがあった気がする。

そして、そのまま私はまた意識を手放した。

見知らぬ天井

深い、闇の中だった。

私を見ると、周りの人たちが一斉に罵倒を浴びせてくる。この世界の人で知り合った人、前世で通っていた学校の先生、クラスメイト、そして自分の親。

「お前は不吉な子どもだ。親だけ死んで、何故子どものお前が生きている」

「本当に■■■■は相変わらずこの教科の成績が悪いな。やる気あるのか？ 大学受験があるのに」

「■■■■ってなんか不気味だよね。何か言っても表情一つ変えないし」

「■■■■、何でこんなこともできないの。将来、困るのは自分なんだよ?」

……ああ、五月蠅いな。だからなんだ、もう過去のことなのに。どうしてこうもしつこく夢に出てくるのか。君らの言うことはもう聞き飽きたし、何とも思わない。

普通は、この世界で死んだ両親に罵倒される夢を見るのだろうか。「何でお前が生きているんだ」と、そう言われて恨み言を散々吐かれるのだ。

今はまだそのような夢は見えていないが、いつか見るときがくるのだろうか。

——願わくば、どうかこの夢が早く覚めますように。

意識がゆっくりと浮上する。

私が目を開けると、灰色の見知らぬ天井が視界に広がった。やけに重い体を起こして回りを見渡してみると、なんとも質素な部屋がそこにあっただ。

この部屋の主は今はいないようで、水を打ったようにしんと静まり返っている。

「……というより、なんでここにいるんだろう」

森で過呼吸を起こしてしまったのは覚えているのだが、その後のことはさっぱり覚えていない。きつと、森で会った彼が私を運んで、ここで介抱してくれたのだろう。勝手にそう自分で解釈して、体を起こしたときに捲れた布を再び自分に向け、大人しくここにしていることにした。

……もし、その予想が外れていたら、いろいろと詰んでしまうが。

自分の予想が当たっていることを願いつつ待っているとカタン、と戸が開く音がした。どうやら帰って来たようだ。ミシミシと床が軋み、倒れる前に見た彼が部屋に入ってくる。

「お、起きたか。調子はどうだ」

「大分よくなりました」

「そうか」

「迷惑をかけてすみません」

私が頭を下げて彼にそう言うと、気にするなどでもいうように笑って私の近くに座る。やはりこの家の主は彼で間違いないようだ。

予想が当たったことにホツとしつつ、介抱してくれたお礼を彼に伝える。

「介抱してくれてありがとうございます」

「どういたしまして。いや、それにしてもすまないことをしたな」

彼はばつが悪そうに頭を掻く。何かされたっけ？と疑問に思っていると、相手はとても言いづらそうに口を開いた。

「あー、その、親のことだ。まさかあんな反応をされるとは思っていなかったからな」

「……………」

「そう怖い顔をするな。だから、悪かったと言っているだろう」

「……怖い顔をしてるつもりはないんですけど。親のことは、少し動揺してしまっただけです」

あの時は不意に聞かれたから、驚いてしまっただけで決して、地雷

が爆発したのではない。誰がなんと言おうと、違うたら違うのだ。
「そ、そうか」

彼は少しもりながら、私から目をそらす。……そんなに怖い顔をしているのだろうか。前世ではよく仲の良い友人に、「某英雄ではないけれど、目で人を殺せそうならい絶対零度の目をしているときがあるよね」と言われていたが、そんなに冷たい目をしているつもりはない。

ともかく、親に関することは完全ではないが、心の準備はできている。言葉にはしていないが、恐らく彼は私が何故あんな反応をしたのか気になっているはずだ。私はひとつ、大きく深呼吸をした後にゆっくりに言った。

「親は、死にました。つい、最近のことです」

それを聞いて彼は一瞬、目を見開いたが、すぐさま納得したかのようになんて頷く。

「……やはり、そうだったか」

「えっ」

彼の言葉に、私は思わずそう返してしまった。まさか、気づかれているとは……。

「誰だつてあんな反応をされたら、さすがに察するだろう。それに、お前をここに運んで来るとき、少し魔されていたからな」

呆れたような顔で、彼は私にそう言う。確かに、いくら鈍感な人でも、聞いたとたんに過呼吸を起こされたら気づくか。おまけに、魔されていたのなら尚更。

そう考えに耽っているうちに、眉間にしわがよっていたらしい。彼が自分の眉間に人差し指をトントン、と軽く叩いて「しわがよってるぞ」と私に教えてくれた。

「子どものうちからそんな顔をしていると、将来気難しい顔になるぞ」「余計なお世話です」

気難しい顔って、どんな顔だよ。心の中でツツコミをする。考え事をしてしていると眉間にしわがよるのは、前世からの癖なんで。直すのは難しいと思う。

その後、お腹は空いていないか？と聞かれたので、正直に空いてます、と伝えると果物を一つこっちに投げて渡してくれた。案外、彼は面倒見がいいのかもしれない。

私は渡された果物をしげしげと眺めて、そう思った。

斧を持った男と少女

さて、腹も満たされたことだし、今後の事を考えなければいけない。今日は彼のおかげで食べ物に困ることはなかったが、明日以降は自力でどうにかしなければならぬのだ。

いつまでもここに在るわけにはいかないし。かといって、あてがあるのかといわれると、無いとしか答えられない。それに、すごい今更だが親切にしてもらったとはいえ彼は赤の他人だ。介抱をしてやったのだから、なにかお礼をしろと言われるかもしれない。……今までの様子を見る限りそれはありえないと思うが。

私の近くに胡座をかいて座っている彼をチラリと見る。どこからか取り出してきたすり鉢のような容器に草を入れて、棒でそれをゴリゴリと磨り潰している。

「なにをしているんですか」

「これか？薬草を磨り潰して、薬を作っているんだ」

ほれ、と言つて私にすり鉢を渡してくる。覗いてみると、すり鉢の中は緑色のペースト状になった薬草があった。つんとした草独特の臭いが鼻をくすぐる。

「何の薬ですか？」

気になって、彼にそう質問をした。粉末ではないから飲んで使用する物ではないだろう。

「傷薬だな。色はこんなんだが、効き目は十分にある」

「なるほど……」

私の質問に答えると、彼は薬を作る作業に戻る。しげしげと興味深げに彼の作業を見ていると、彼はふと思ひ出したかのように顔を上げた。

「今更聞くのもなんだがお前、行くあてはあるのか」

「ないですね」

「即答か。……じゃあ、これからどうするんだ」

どうするんだつて言われてもねえ。頑張れば、なんとかかなりと思う。でも、冬になったら食べ物も少なくなるだろうし、少し厳しいか

もしれない。

……うん、どうしよう。

「どうしましょうね」

「考えてなかったのか」

「考えてなかったです」

そんなんで大丈夫か、と呆れたような顔で言われる。それに大丈夫じゃないです、と返す。何故か溜め息をつかれた。すみませんね、何も考えてなくて。

すると、彼は顎に手を当てて、なにかを考えはじめた。多分、私のことについて思案しているのだろう。

(別に、どうなったって構いはしないけれど)

彼が結論を出すまで、私はただじっと、目を瞑って待っていることにした。

『貴女は、優しい子なのね』

私の目の前に立っている蓮の瞳を持つ女神かのじよは静かに微笑む。……一体、私のどこを見てそう思ったのか。

『私は、優しくなんてないです。愚かで、残酷。そんな人間です』醜くて、汚い。そして、どこか歪んでいる。本当の自分が判らなく、自分が真実を言っているのか、はたまた嘘を言っているのかも解らない。そんな人間がなんで優しい子だと言われるのか。

『いいえ、貴女は聡明で、酷く優しい。まるで青蓮のように美しい人間よ。』

青い蓮ウツパバラ、か。花言葉は確か、 “清らかな心”

だったような気がする。私には到底、当てはまらない言葉だ。

するりと、彼女は私の頬を撫でる。その手つきはまるで、繊細なガラス細工を壊さないように触れているかのようだった。

『青い蓮の愛し子。貴女に、私の加護わたぐしを授けましょう。純真無垢な貴女が厄わざわいから逃れるために』

——貴女が、幸運になれるように。

そう言つて、蓮の衣を纏つた彼女は私に祝福を与えた。天からは美しい花が雨のように降ってくる。

『……シユリー様、何で私に加護を与えたのですか』

気まぐれな彼女が、人間わたしなんかに加護を与えるなんて。明日は槍でも降ってくるのだろうか。いや、もしかしたら世界が滅亡するのかもしれない。

そう思っていると、彼女——幸運を司る女神・ラクシユミーはただ静かに微笑んで、こう言つた。

『貴女のことを、気に入っているからよ。それに、貴女は自分の幸せを執拗に求めていないでしょう?』

——だから、わたし私は貴女を……。

「おい、起きろ。なに人が真面目に考えているときに、当事者であるお前が寝ているんだ」

彼は私の肩を叩いて、そう文句を言う。どうやら、目を瞑つて待っているうちに寝てしまったらしい。すみません、と素直に謝つて彼の方を見る。

「考えてみたんだが、あまりいい案が思い付かなかつた」

「……そう、ですか」

顔をうつむかせる。やっぱり、私はあの森で暮らさなければならぬのだろうか。

「だが、」

マイナス思考に走りかけていたそのとき、男の力強い声が私の耳に入った。

「二度、面倒を見た奴を見捨てるほど俺は薄情者ではない。かといつて、このままこの場所にいるのは、お前の気が引けるだろう」

「じゃあ、どうするんですか?」

彼はニヤリ、と不敵に笑う。まるで、寧猛な虎が獲物を目の前にした。そんな笑顔だった。

「俺の、弟子になるつもりはないか」

「……弟子？」

私は首を傾げる。弟子って、よく少年漫画とかで見るやつだよな？……私、運動神経あまりよくないよ。ボールを避けたり、隠れたりするのは得意だけれど。

「そうだ。俺はしがないバラモン僧だが、たまに弟子になりたいと言って、武術の教えを乞う奴等もいる。今まで、そういう奴等にしか教えていなかったが、そろそろ自分で弟子をとってみようと思つていな」

なるほど、つまり『ちょうど弟子をとろうと思つていたからお前がなつてみない？』ということだろう。というかこの人、司祭バラモンだったんだ。私からしたら、雲の上に住んでいるような、そんな感じの人たちだ。ちなみに、バラモンはヴァルナ——分かりやすくいうと階級制度の最高位に属している。ヴァルナは司祭階級・戦士クシャトリア・王族階級トリヤ・庶民階級ドラ・労働者階級の四つに分かれている。他にはヴァルナに属さない人、不可触賤民アンタツチャプルという人もいる。

私はこの内の庶民階級ヴァイシヤに属しており、バラモンやクシャトリアを貢納によつて支えることが義務とされている。なにが言いたいのかという、彼らに貢献する立場である私が、彼に弟子入りするのは到底無理だということだ。普通なら、弟子入りするどころか、顔を合わせることができない。ただし、同じバラモンやクシャトリアだったら話は別だが。

幸い、元現代人にほんじんだから、身分階級なんてあまり気にしてはいない。が、郷に入つては郷に従わなければいけないときもある。私は彼に自分の身分を伝えた。殺されてしまふだろうか、なんて思っていると、彼は意外なことを言ってきた。

「なんだ。そんなことか、別にお前が庶民階級ヴァイシヤだろうが俺は気にしないぞ？少し驚いたがな。それに、お前、どこかの神の加護を持っているだろう」

「気にしないんですか。確かに、あなたの言うとおり私は神の加護を持っています。……いつから気づいてたんですか」

「森で会った時からだ。まあ、お前とは違うが、似たような奴と会ったことがあるからな。気配が独特だからすぐ分かる」

へえ、と彼の言葉を聞いて感心する。私以外にも似たような人がいるんだ。さすが古代インド。ファンタジーに満ち溢れている。一度、その人と会ってみたいな。

「で、どうする。俺に弟子入りするか？」

再度そう聞かれる。元々、武術には興味はあったができるかといわれると、そうでもない。よく、学校の授業で剣道をやるとき、竹刀を持って素振りしていると周りが「それで人を殴り殺さないでね!!」等と騒いだり、空手部に体験入部をしたときは「なんか、様になっていて怖い」とか言われていた。私をなんだと思っているのか……。

閑話休題

とりあえず、彼がいいなら弟子入りさせてもらうことにした。すると彼は嬉しそうに笑って「お前は鍛えがいがありそうだ」と言う。そりゃ、こんなにヒョロヒョロな体つきをしているからね。

「そういえば、まだあなたの名前を聞いていないのですが」

これから長い付き合いになるのだから、ちゃんと相手の名前を聞いておいたほうがいいと思って、彼に聞く。私は、今世の自分の名前はあまり好きではないからな……でも、聞いたからには名乗らないと失礼か。

「俺の名か?——俺の名はパラシユラーマ。ちまた巷では「クシヤトリヤ・キラ戦士殺し」とも呼ばれている」

斧パを持ラったシラーマ。ヴィシユヌ神第六の化アヴァターラ身であり、インド神話における聖仙ジャマダグニの子。二十一回に渡ってクシヤトリヤを全滅させ、罪を犯したが故に、他の化身同様に天に昇ることができず、地上に留まった神の代行者。

私は大きく目を見開く。あのインド二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』に登場する彼が私の師となる人物だとは。

「なにが、しがないバラモン僧ですか。しがないどころかとても有名じゃないですかあなた」

「まだ十にもなっていない子どもが俺のことを知っているとは……。」

今は森に隠居している身だから、しがないバラモン僧”であつてい
るとおもうが？」

「あつてません」

「随分バツサリと言うな。ほら、俺は名乗ったから次はお前の番だ」

「私は、あまりこの名前が好きではないんですが……——私の名前は

××××といます」

×××、私には似合わない名前だ。自嘲気味にさういうと、彼は良い名

前区やないか、と言って褒めてくれた。

「お前がその名があまり好きではないというのなら、さうだな。青

……は率直すぎる。お前は年の割には物言いがバツサリしているか

らな、小刀シヤストルラとでも名乗れ。自分の真名が好きになれるまではな」

青、と呟いたのは私の瞳を見て言ったのだろう。私の瞳は青い蓮の

花のような、鮮やかな青ブルーをしている。髪は透明感のある灰色アールグレーで、この

辺りでは見ない色だ。肌の色もこのインドでは珍しい色白の肌をし

ているので、とても目立つ。

「シヤストルラ、ですか」

「ああ、そうだ」

小刀か。日本でいう短刀のようなものだろう。刀といえば、某刀剣
擬人化ゲームを思い出す。気に入ったので、今度から人にはさう名乗
ることにした。

「分かりました。ではこれからよろしくお願いします、師匠」

「こちらこそ、よろしく頼むぞ。我が弟子。」

——かくして、彼女の物語が幕を開ける。ヴァイシユヌの第六の
化身アヴァターラと彼女が邂逅することによって、あるはずのないシナリオが世
界に顕れたのだが、はたして、運命の転生者はこの人生ゆめに何を見るの
だろうか。そのことは神のみぞ知る……。

2章 両雄との邂逅 数年後、ある日の会話

パラシユラーマに弟子入りしてから数年、私はまだ子どもと呼ばれるような年齢だが、それでも人並みに武術を身につけることができた。

彼の修行は過酷で、素人の私は何度も挫けそうになったが、血を吐くような努力のおかげで最近では、彼の攻撃を防ぎ、彼から一本取ることができるようになった。

彼が私に武術を教えるにあたって、見いだした才能は四つ。一つは剣術。女ということもあり筋力は弱いがある程度鍛え上げたのと、とある方法を用いることで問題なく彼の重い一撃を受け止めることができる。二つめと三つめは弓術と馬術。弓術も腕の筋力が必要だが、これも剣術同様、問題はない。馬術は単に馬の扱いが上手かったからで、特に特別なことはしていない。

そして四つめは真言^{マントラ}。

師匠曰く、『お前は言霊が人並みより優れている』とのこと。なので、他の人が唱えるよりも効果が強く出るらしい。ちなみに普通の言葉にも霊力（魔力）を乗せても効果があるようで、これを応用して私は自分の筋力や身体能力を強化している。もちろん、真言に頼りすぎないように自分で毎日鍛えているが……。

「なんで筋肉があんまりつかないんだろう……」

そう、いくら鍛えても私のこの細い腕はなかなか筋肉がついてくれない。この前なんて友人ならぬ友鳥のラクタパクシャには『友の腕は己^{おれ}が掴んだら真つ二つに折れそうだな』なんて言われてしまった。一応、目立たないけれどちゃんと筋肉ついているのに……解せぬ。

「おい、シヤストルラ。ちよつと話があるんだが」

「何ですか師匠。また追加の鍛錬メニューをやれ、とか言うつもりですか」

森で一人、彼から貰った片刃刀を持って素振りをしていると、後ろ

から彼に声を掛けられた。周囲の気配には気を配っているので、彼が来ておらずに反応することができた。

「いや、そうじゃない。なんで最近、俺に対する当たりが強いんだ。反抗期か？反抗期なのか？」

前までは素直で可愛かったのになあ、とぼやくパラシユラーマ。あなたは私の父親か、いや義理の父親ではあるけれど。

「はいはい、そういう茶番はいいんで。話ってなんですか」

「お前なあ……まあいい、話っていうのは王家の主催する競技会に参加してみないか、ということだ」

「競技会？」

「そうだ、ちなみに飛び入り参加可能だ」

「行きます」

思わず即答する。師匠以外の人たちと腕試しをしてみたいし、何より久しぶり町に行ける良い機会だからだ。ただひとつ、気になることがある。それは――

「師匠、あの、王家主催って言いましたよね」

「確かにそう言ったな」

「相手はクシャトリヤですけど、私なんか行っても大丈夫ですか」

そう、あの戦士クシャトリヤと王族嫌いの彼が何故、こんな話を持ち出してきたのか。とても嫌な予感しかしない。彼は片眉を上げて、愚問だなどでもいうような表情をする。

「大丈夫だろう。それに、お前は少し俺以外の人間と関わったほうがいいと思っただけからな」

「……その心は？」

「競技会で自慢げに武術を披露している奴等の面目を潰してこい」

「ですよね」

とても良い笑顔で言い切ったよこの人。そして、師匠のクシャトリヤ嫌いは相変わらずですね。

私は自分が纏っているマントのフードを深く被る。一応、胸が目立たないように布を何枚か巻いておく。競技会に出るからには“女”の格好で行くのはまずいだらう。一人称は……そのままでもいいか。

「男」でも『私』っていう人いるし。声もまあ、大丈夫だろう。顔を隠せば女とは判らないと師匠から言われたし。

そして最後に彼から貰った片刃刀と、自分で作った弓を携えて、久しぶりに町に行く。

「では、行ってきます。大会の状況によっては、帰りが遅くなるかもしれません」

「おう、分かった。行ってこい、楽しんでやれよ」

ヒラリと片手を上げて彼は私を見送る。ここから町まではだいぶ遠いからなあ、仕方がない。走ろう。

地面を勢いよく蹴って、走り出す。なだらかな下り坂が続いているので、結構スピードが出る。……もしこれで間に合わなかったらどうしよう。

不安になりながらも、私は町まで急いだ。このとき、私は気づいていなかった——自分が参加しようとしている競技会が、あのクル族王家の主催する競技会だということに。

波乱の競技会

晴れ渡った青空の下、賑やかなラツパと太鼓の音が鳴り響き、数万の観衆がきらびやかな広場に集まっている。クル、パインドウの兄弟たちがそれぞれ己の優れた武芸を披露し、大会最後のハイライトである褐色の精悍な顔立ちをしたインドラの息子・アルジュナが剣、弓、棍棒、槍の妙技を終え、いよいよ大会の幕が閉じられようとした時、それは起こった。

広場の入り口近くでシヤラリと金属のぶつかる音と、ズザーツと土が擦れるような音が響いてきたのだ。観衆と王家の王子たちは何事かと一斉に入り口を見る。

そこには、二つの人影があつた。一つは黄金の鎧を身につけ、黄金のイヤリングを煌めかせた青年。その非の打ち所のない美貌は、落ちて着いた様子で辺りを見回している。そして、もう一つは息を切らしている、フードを深く被った少年。顔こそは見えないが、華奢な体つきをしていた。

「……大丈夫か？」

黄金の鎧を身に纏っている青年——カルナは自分の後からやって来た少年に声を掛ける。男にしては、小柄なその体は上下に揺れている、今にも倒れそうだ。少年は律儀に、途切れ途切れだが返事を返す。「わた、し、は、だいじょう、ぶです。しんぱい、してくれて、ありがとう、ございます」

「そうか」

それを聞くとカルナは前に向き直り、広場の中心に足を運ぶ。一方、少年と見事勘違いされたアーシャことシャストルラは、ぎりぎりのところで大会に間に合ったことに安堵していた。結構な距離を走ってきて、息を切らしているが、軽く息を整える。

サツと広場の中央に足を運んだカルナの後を追って、彼女も広場に入ると、先に飛び入り参加していた彼は、アルジュナが披露した技をすべて完璧に再現していた。

さらに、カルナはアルジュナに決闘を申し込み、それをここぞとば

かりにドウリーヨダナが歓迎していたのだ。そのせいも、広場は騒然とした雰囲気になっている。

その中心に立っている黒と白の人物。アルジュナは飄々とした様子でいるカルナに向かい、語気鋭く言い放った。

「……招かれざる闖入者ちんにゆうしやの分際で、勝手な真似をしないでいただきたい」

「この広場はすべてのものに開かれているはずだ。現に、オレ以外にもこの場に立とうとしている者がいる」

「なに？」

カルナがさらりと言った言葉にアルジュナは眉をひそめる。すると、ざわめく観衆の中から一人小柄な人物が姿を現した。先ほど息を切らしていた少年かのじよだ。深く被ったフードの下に見える青蓮の瞳は真っ直ぐふたりを見つめている。

「彼の言うとおり、私もこの競技会に飛び入りで参加しに来ました。

……君らからしたら無礼な行為かもしれないけれど」

「そういうことだ。お前が歎たんじている暇はない。早くその弓を構えるがいい」

鋭い目付きでアルジュナはカルナを見据え、シャストルラはやれやれとでもいうように首を竦める。

空はいつの間にか厚い雲に覆われ、その下を雷光が龍の如く走り去さり、雷鳴を轟かせた。インドラ神が己の息子アルジュナに味方しているのだ。それを知ったのか、スーリヤ神は太陽の強い輝きでわが子カルナの頭上の雲を追い払う。

会場はドウリーヨダナ側とパードウ側と真つ二つに割れ、貴婦人たちもそれらに釣られて敵味方に分かれる。アルジュナへの挑戦者の一人が、自分が最初に産んだ子供、カルナであることを知ったクンティは気を失っていた。

そんななか、シャストルラは随分と冷めた目でアルジュナ側とカルナ側に分かれた観衆、そして王族たちを見ている。他の人たちは気づいていないが、彼女の周りには儂い幻想的な蓮の花が咲いては消えている。ささやかながらも、女神ラクシュミーは彼女を応援しているの

だ。

すると、それに目敏く気づいたドウリーヨダナが彼女に声を掛ける。

「その蓮に愛されし者。お前もアルジュナに決闘を望んでいるのか」

「いいえ、違います。カウラヴァの長兄殿。私はただ、自分の武術の腕を確かめるが為にここに参上したのです」

「ふむ、そうか。ならば、今ここでお前の腕を見せてみよ」

ドウリーヨダナの言葉に騒然としていた広場が静まり返る。そう言われたシャストルラは少し戸惑いの表情を浮かべた。

「私が得意なものが、その、剣なのですが……。相手がいないので、披露のしようがありません」

「では、弓はどうだ」

「一応、出来ますが」

「ならそれをやれ」

「……分かりました」

諦めの表情でシャストルラは広場の中心に出て、弓を構え矢を刺す。周囲の人々は、あんな細腕の少年が弓を引けるわけないだろうと鼻で笑っていたが、次の瞬間。勢いよく放たれた矢が「バンツ」と木で出来た的を粉碎したことによって、自分たちの認識が間違いだったことを悟る。

「……しまった。力加減、間違えた」

シャストルラ少年がポツリと呟く。それを聞いた周囲の人々と王家の人は嘘だろ、とでもいうように一斉に彼女に視線を向ける。その近くにいたカールナとアルジュナにいたっては、驚いたように目を見開いて、彼女を見ていた。

頬を掻きながら、彼女はドウリーヨダナに体を向け、気まずそうに話し掛ける。

「あの、すみません。的を壊してしまって……。これでいいですか？」

「あ、ああ。十分だ。よくやったな」

二重の意味を込めて、そう言ったドウリーヨダナ。まさか、こんな

に小柄な少年が、矢的を粉碎するとは思ってもいなかったのだらう。

「ありがとうございます……?」

しかし、ドウリーヨダナの言葉をよく分かっていない彼女。ついでにいうと、彼女の周りは、先ほどよりも多くの蓮の花が咲き誇っては、風に揺れて消えている。

女神ラクシユミーよ、少しはしやぎすぎではないだろうか。

そんななか、勇気を振り絞って軍師・クリパがシャストルラに「今からここで、決闘を行う。そなたは観衆側に戻ってもらってもよいか」と伝える。それに「分かりました」と頷いて、シャストルラはすぐに広場の中心から退場する。

ホツと安心したかのように、息をつくクリパ。気を取り直して、カルナとアルジュナの間に立ち、決闘の立会人として厳かに宣告した。

「決闘のしたきりとして、互いの素性を明らかにせねばならぬ。アルジュナはクンティー王妃の三男であり、パードウの王子だ。」

——挑戦者よ、そなたの素性を明かすがよい。王族は己より下位の者とは決して決闘は行わないのだ。

その言葉を聞くと、カルナは雨に打たれた花のように深く頭を垂れてしまった。彼は王族か、それ以上の位の出ではなかったのだ。自分の素性を明かしたところで、断られてしまうのが目に見えている。

黙り込んでしまうカルナ。そんな彼に救いの手を差しのべたのは、カウラヴァの王子・ドウリーヨダナだった。

「もし、この者が王族ではないから闘わないというのなら、俺はたった今ここで彼をアング国の王にしよう。さすれば、誰も文句をいうまい」

わっ、と大歓声に包まれる広場。ドウリーヨダナの言葉で王位就任に必要な儀式がその場で済まされ、カルナはめでたくアング国の王となった。

そして、いよいよ決闘が行われると思われたその時。一人の老人がカルナの側に歩み寄った。その姿を見るや否や、彼は弓矢を置き、戴冠式の灌頂で水が滴っている自らの頭を深々と下げる。

老人——アデイラタは、濡れたカルナの頭を拭き「わが子よ」と呼びかけ王になったことを祝福した。

「なんだ、お前は御者の息子だったのか」

カルナに歩み寄った老人がドリタラーシユトラ王の御者、アデイラタであるのを知ったビーマは、からからと笑う。

「御者の息子がアルジュナに決闘を挑む資格はない。アング国の王など笑止千万！ 剣の代わりに鞭を振るっておとなしく馬の尻でも追いかけていろ」

ビーマの罵倒に、カルナは唇を噛みしめる。そこで、ドウリーヨダナが立ち上がり、言葉を発しようとしたが、凜とした声が響き、それを遮る。

「いくらなんでも、そんな言い方はないと思いますが」

「なんだおまえ。この俺に口答えするのか」

「口答えをするとは、誰も言っていないかもしれませんが？ 私はまだ、あなたの言い方はないと言っただけです」

観衆に紛れていたシャストルラが再び広場に姿を現した。その目は氷雪の如く冷たい。一瞬、ビーマは彼女の目を見て怯む。すかさず、ドウリーヨダナがシャストルラという言葉に続くようにビーマに言う。

「そうだぞ、ビーマ。この者の言うとおり、そんな言い方はあるまい。闘うことが我々、クシャトルリヤ戦士の宿命ではないか。相手が自分より下位であろうとなかろうと、雌雄を決する時に水をさすのは無粋だろう」

それに、と彼はビーマを睨み付けてこう言った。

「英雄も河も源は同じではないか。両方とも源流は分らない。わが師ドローナは水壺から、軍師クリパは草むらから生まれている。お前だってそうではないのか？ 輝かんばかりの黄金の鎧と耳環を身につけた、太陽のようなこの男が、どうして只人から生まれたりするものか」

——彼はアング国のみならず、全世界と俺の友情をほしのままにするに値する男だ。俺の言葉に不満があるものは、この場にて彼と共にその弓をへし折ってみるがいい。

ドウリーヨダナの熱弁に群衆は歓喜する。ちょうどその時、日は沈み辺りは暗くなり、今が潮時とみたドウリーヨダナはカルナの手をとって広間から姿を消し、パーンドウ兄弟たちも自らの師と共に帰城の途についた。

人々に紛れて、シヤストルラも帰ろうとする。が、突然後ろから何者かに腕を捕まれ、そのまま人の少ない場所まで連れていかれてしまった。

振りほどこうとするが、なかなか相手は手を離してくれない。心の中で、彼女はパラシユラーマに謝罪の言葉を述べる。

(すみません、師匠。やっぱり帰りが遅くなりそうです)

邪心と太陽と

帰ろうとしたところ、いきなり腕を捕まれ、そのまま彼——カウラヴアの三男、ドウフシャーサナに人気のないところを歩いてどこかに連行されているシャストルラは諦めの表情を浮かべていた。何故、こんなところに王家の人がいるんだ。全員、城に帰ったのではなかったのか。等と心の中で文句を言っているが、相手は知るよしもない。

「あの、この手を離してくれるとありがたいのですが」

「それは無理ですね。兄上……ドウリーヨダナに貴方を連れてくるように言われたのですから」

「王家の人間が護衛も連れずに、たった一人ですか？私があなたに何かしらの危害を与えるかもしれないのに」

「……護衛なんて連れてきたら、目立つでしょう。それに貴方は、人に理由もなく危害を与える人間には見えません。野蛮な人間は、人を庇う様な真似はしませんから」

淡々と、そう話すドウフシャーサナ。今日の競技会での私の行動を言っているのだろうか……それにしても、ドウリーヨダナが私を連れてこい、と言った理由が気になる。駄目元で、彼に聞いてみるか。

「何故、ドウリーヨダナ様が私を連れて来いと？」

「貴方に興味があるからだそうです」

「興味？」

「ええ、そうです。……こんな細腕の少年が、どうやって的を破壊したのかが気になるようで」

「はあ、そうですか」

細腕の少年、ねえ。やっぱり、顔を隠して男物の服を着るとそう見えるのか。……腕が、細いと言われたのが軽くショックだが。

会話が途切れ、ツカツカと無言で歩き続ける二人。次第にひとけが増えてきて、賑やかな城の近くまで来た。……ちよつと待って。このまま城に入るつもりじゃないよね？

彼女の予想通り、そのまま腕を掴んだ状態で城の中に入っていくドウフシャーサナ。そして、彼に言われるがままに、宴会の席に同席

することになってしまったシャストルラはただひたすら遠い目をしていた。

そう、何故ならば……………。

——まさか、ここが型月世界軸の古代インドだなんて、思いもしなかった。

今更、この事実を思い出していたからだ。競技会にギリギリ間に合ったとき、カルナに声を掛けられたのが、このとき「何か聞き覚えのある声だな」ぐらいにしか思っていなかったのだ。しかし、広場に着いて中心にいた彼らを見たとき、思わず自分の頬をつねってしまった。

何故なら、自分が前世にハマっていたゲーム『Fate／Grand Order』に登場していた二人がそこに立っていたからだ。

何で気づかなかった、私。この世界に生まれてから気づける要素は十分にあつたはずなのに。精霊とか、神とかそんな存在が身近にいたせいか、感覚が鈍っていた。人間の適応能力って恐ろしい。しかも『マハーバーラタ』の世界軸でもあるとか、死亡フラグ満載じゃないですか。というか、何で私ここにいるんだろう。

「どうした。先ほどから何やら考え込んでいるが」

一人、隅つこのほうで座っていると、華やかに着飾ったカウラヴァの長兄、ドウリーヨダナがこちらに近づいてきた。

「何で私がここににいるのか、ということを考えていただけです」

「そりゃあ、俺がお前に興味があつたから、わざわざドウフシャーサナに連れてくるように頼んだからだな。あと、堅苦しいから敬語は使わなくていい」

「わかった」

すんなりと敬語をやめて、返事をする。彼は満足したのか、笑って私に手招きをしてきた。近づいていくと、手首をガシツと掴まれて、ズルズルと賑やかな宴会席に連れていかれる。

「いきなりなに!?この手を離してくれと嬉しいんだけど?」

「だが断る」

「ふぎけるな」

言い返すと鼻でフツと笑われる。マジでふざけるな。後で背負い投げでもしてやろう。

そう思っているうちも、ズルズルと引きずられて華やかな宴会席に連れていかれる。

「お前、普段ちゃんと食ってるのか？手首細すぎだろう。よく弓なんて引けたな」

「失礼な、食べているよ」

「嘘だろ」

「ここで嘘をついて何になるのさ」

ため息をつきながら、彼にそう答える。人がちゃんと食べてるのか心配するとか……君は私の母親か。この人、物語的にいうと悪人のはずなんだけど。

悶々と考えていると、いつの間にか一番賑やかな宴会席の近くまで連れて来られていた。パツとそこでようやく手を離される。彼はここに座れ、と自分の近くを指差し、私はそこに渋々座る。そして、適当な果物を私に投げて渡してくると、「それでも食って待ってろ」と言い残してそそくさとどこかに行ってしまった。

ワイワイと騒がしい広間。きらびやかな衣装を着た踊り子たちが軽快に舞い、楽士たちが音楽を奏でる。

「騒がしいのは、あんまり好きじゃないんだけどな」

ドウリーヨダナに渡された果物を食べながら、小さく呟く。いままで静かな森で過ごしていたせいかな、こういう賑やかなところはなかなか落ち着かない。

「待たせたな……なんだ、お前あまり食ってないのか」

「君が帰って来るまでの、この短い間に食べきれないでしょう」

「ただ単に、お前の食べる速度が遅いだけだと俺は思うが」

「君は『配慮』という言葉を知ってる？」

「失礼だな。知っているに決まってるだろう」

私の発言にムツとした顔をするドウリーヨダナ。本当に知ってるのか疑わしいが、とりあえず私は彼の隣にいる人物について、質問をする。

「ところで、ドウリーヨダナ。隣にいる彼は？私の見間違えでなければ、アンガ国の王だと思っただけけれど」

「ああ、そうだ。我が友、カルナだ」

誇らしげに、彼は胸を張ってカルナを紹介する。湖の湖面のように静かな瞳は、まっすぐに私を見つめている。

「オレの名はカルナという。……お前とは、競技会で一度言葉を交わしたことがあるが、覚えているだろうか」

「もちろん。覚えていますよ」

「おい、お前。敬語」

「あ、すいま……ごめん」

ドウリーヨダナに言われて、慌てて敬語をはずす。いや、だって。思わず敬語を使ってしまっぐらい彼は貫禄があるんだよね。

「別にお前がどのような言葉を使えどオレは気にしない。好きにするといひ」

「えーつと、ありがとうございます」

要は、自分の話しやすい喋り方でいい……ということだよね。彼にお礼を言い、今度は自分の名を名乗る。

「私の名はシャストルラといひます。と、言ってもこの名は師がくれた名前なので、本名ではないのですが」

「そうか。よろしくたのむ」

一応、正直に自分の名前は仮名ということも伝えておく。すると彼はコクリと頷き、そう言ってきた。ドウリーヨダナは意外そうな顔をして、私を見る。

「お前、師匠がいるのか」

「言っただけだったっけ？」

「初めて聞いたが」

お前の師匠は誰なんだ、と聞かれる。どうしよう。別に教えてもいいんだけど、この先のことを考えるとなあ。あと師匠で思い出したけれど、いい加減帰らないと怒られる。遅くなるとは伝えてあるが、いくらなんでも深夜になるまで帰らなければまずい。

「秘密。それに、いい加減帰らないと師匠に怒られるので帰りたいん

「だけど」

「そうなのか？」

「はい。……多分、今頃怒り心頭で待っていると思います」

戦斧を構えて出迎えてくるパラシユラーマの姿を思い浮かべるシヤストルラ。そこから住んでいるマヘーンドラ山全体を使った逃走中が始まるのが目に見えている。

早く帰らないと危ない。主に私の命が。

サツと一瞬にして私の顔が血の気が引いたのを見た二人は心配そうにこちらを見ている。今からまた走って行けば間に合うだろうか。いや、着いたところで息を切らしているのだからその隙にザクツと殺られるかもしれない。

「……大丈夫か」

「大丈夫です。なんとか逃げ切つてみせますので」

「お前は一体、何の話をしているんだ」

心配するカルナと呆れるドウリーヨダナ。その時、フワツとどこからか風が吹いてきて一羽の、赤い翼を持つ鷹が現れた。神々しく光輝くその鳥はくるりと一周、広間を旋回する。その姿を見たシヤストルラは左腕を上あげ、鳥が留まれるようにした。

「バサリ、と熱を発しながら彼女の腕に留まった鷹——」

赤い翼を持つ者ラクタパクシヤはその鋭い嘴を開いた。

『友よ、御前の師おまえから「いい加減に帰って来い」と言伝を預かってきた。帰りは己おれが送っていくから安心しろ』

「あー……やっぱり。そろそろ帰らなきやまずかったか。伝言をありがとう、ラクタパクシヤ」

『礼には及ばない。友の為ならば己は何処へだって飛んでくるぞ』

「それならば安心だね。相変わらず頼もしいことを言ってくれる」

そんな会話をしているなか、ドウリーヨダナは真つ青な顔をして、カルナは興味深い様子でラクタパクシヤを見ており、広間はいきなり登場したこの鳥に驚いて騒がしい雰囲気になっていた。

「おい、お前。まさかそいつは……」

「うん？ ああ、ラクタパクシヤだよ。私の友人ならぬ友鳥。綺麗で

しょう?」

「いや、ドウリーヨダナが言いたいのは、そういうことではないと思うが」

少しずれたことを言ったシャストルラに、カルナは冷静に答える。とうとう我慢の限界だったのか、ドウリーヨダナは声を上げる。

「そいつは……鳥の王、ガルダではないか!何故、偉大なる神鳥がこんなところにいるんだ!!というか、何でお前はそんな奴と仲が良いのか。おかしいだろ!」

「ドウリーヨダナ。落ち着け」

「カルナの言うとおりでよ、何でそんなに驚くんだか」

「友よ、あの人の子のような反応が普通ではないのか。己は滅多に人前に姿を現さない故」

「そうかな?私、この間タクシャカに会ったけれど」

「タクシャカ!?あの竜の王か!」

「うん、そうだけど……」

自分の知り合いの大半が、とんでもない面子とはよく理解していないシャストルラ。一方のドウリーヨダナはキャパシティーオーバーのせいか、頭を抱えていた。それを冷静に見ているカルナがポツリと一言、呟く。

「……ところで、お前は帰らなくていいのか」

「あ、忘れてた。ありがとう、カルナ」

じゃあね、と言ってガルダことラクタパクシャが入ってきたであろう窓に駆け寄っていく彼女。そこから勢いよく窓の縁を蹴って、飛び降りていった。

ここは城の二階だ、なのに彼女は躊躇いもせず飛び降りていったのだ。人々は驚いて、一斉に窓に近づいて行こうとする。その時、下から炎の如く揺らめく赤い光が上に一直線に登ってきて、闇の中で煌々と輝き、瞬時に飛び去った。

「ラクタパクシャ、迎えに来てくれてありがとう」

『なに、気にするな。友の身の安全のほうが大切だからな』

「身の……安全……。師匠とのリアル鬼ごっこ……。考えると頭が痛

い」

心地よい夜風に吹かれながら、私はラクタパクシャと話す。彼は普通の鷹の大ききから、人間が一人乗れるくらいの大ききになった。た。

「それにしても、今日は波乱の一日だった。なのに帰ってから師匠の説教（物理）とか……」

『頑張れ。友なら余裕で逃げられるだろう』

「君は私をなんだと思っているんだ」

『他の奴に自慢できるほど強い友人だと思っているが？』

「師匠ほど強くないよ。私は」

満天の星空を見上げながら、私は言う。 チャンドラ 月が優しく照らすこの常闇の世界に、その言葉はやけに大きく響いていた。

雷帝と正法と

ラクタパクシヤに送ってもらった後、案の定シヤストルラの想像通り、戦斧を構えて出迎えてきたパラシユラーマ。一見、笑っているように見えるが、その目は据わっている。

「遅かったな、我が弟子よ。まさか、競技会が真夜中まで行われていたわけではあるまい」

「はい、あの……すいませんでしたっ!!」

九十度に頭を綺麗に下げるシヤストルラ。下手な言い訳をしたら殺られるのは目に見えている。かといって、正直に『カウラヴァの長兄に呼び出されていた』だなんて言った暁には、「ほう、そうか。クシヤトリヤ王族がお前に何の用が……少し待ってろ」と言っただけ話し合い（物理）をしに行くに違いない。

さて、どうしよう。師匠は黙ったままだし。このまま『逃走中 in マヘーンドラ山』師匠と楽しいリアル鬼ごっこが始まってしまふのか。

「師匠……。師匠？あの、なんで空を仰いでいるんですか」

「いや、お前はなんというか、潔いな」

「……はい？」

片手で顔を覆って、「はあ」とため息をつく彼。早く中に入れてでもいうように、手招きをしている。側に寄ると軽くデコピンをされた。「うわっ。なんですか」

「今日のところはこれで済ませてやる。夜も遅いし、さっさと寝ろ」
「……？分かりました」

師匠にしては珍しい。まさかこれだけで済まされるとは思いもしなかった。てつきり、怒り心頭で待っていたから説教をされるのかと思っていたのに。明日は槍でも降って来るのだろうか。

まあ、いいか。彼の言われた通りに、さっさと寝てしまおう。いろいろあって疲れたし。

スツと彼の隣を通りすぎて、自分の部屋へ向かう。窓辺には、先ほど私を送ってくれたラクタパクシヤが留まっていた。月明かりに照

らざれているその姿は、とても幻想的だ。

『どうやら怒られずに済んだようだな』

「うん。師匠にしては珍しいよね」

『まあな。あの破天荒な奴が怒らないのは、多分御前おまえだけだろう』

「え。私、結構怒られてると思うよ」

『そうでもないぞ』

バサリ、と翼を広げて中に入ってくる彼。次の瞬間、赤い炎に包まれたかと思うと、一人の少年がそこに立っていた。鋭い金の瞳は私を射ぬいている。私より頭一つ背の高い少年は、ポンと私の頭に手を乗せ、口を開く。

「御前は正直者だからな。それに自分の武術の腕を上げるが為に、日々努力をしているだろう」

「私は、正直者なんかじゃないよ。自分の保身にすぐ走ってしまう。弱い人間さ。武術だって、それこそ血を吐くような努力をしなければ、あの人には追いつけないしね」

「……その後ろ向き思考は、どうにかならないのか」

「これでも、昔に比べればまだマシなほうだよ」

人の姿になったラクタパクシャは、私を軽く抱き寄せてきた。心地よい暖かさに、思わず目を瞑ってしまいそうになる。

「……君は、相変わらず暖かいね」

「御前は昔から体が冷たいからな。余計だろう……まるで、海底まで行ってきたかのように、冷たい身体からだだ」

ぎゅつと抱き締めてくる彼。さらりと彼の赤い髪が流れて私の首筋にかかる。きつと、海の底に潜む竜王の都に彼の母とナーガたちで行ったことを思い出しているのだろう。

「私は、大丈夫だよ。海の底に沈みはしないし」

「……だが、タクシャカと会ったのだろうか?」

「いつも、ちゃんと帰してもらっているから、安心していいよ」

私がつとうとし始めたのを見てか、体を離して彼は私を横にする。

「そう、か。でも気を付けるに越したことはない。彼奴はナーガのよ
うに狡猾な奴だからな」

「うん。分かっている、よ」

コクリと頷く。だんだん目が重くなってくるが、それに逆らって、目を開こうとするとラクタパクシヤは私の目に手をかざす。……大人しく寝ろという意味だ。

「お休み。我が友よ。ゆっくり休め」

「……う、ん。おや……す……み」

優しい炎の暖かさに、意識が微睡む。彼が側にいると、何故かとても安心するのだ。

——人といるときよりも、ずっと。

『御前は、不思議な人の子だ』

珍しく、人の型をとっている鳥の王・ガルダは目の前にいる青い蓮ウトバラの愛し子をまじまじと見て、そう言った。

『そう？ 私からしたら、君が人に成れることのほうが、よっぽど不思議だよ』

淡々と、アーシヤはガルダの言葉に答える。その青蓮の瞳は、彼に向けられることはなく、ただ蒼空を見つめていた。

『……神でさえも己おれを恐れて近づいて来ないというのに』

自分を乗り物としているヴィシユヌ神とその妃ラクシユミーは別だが。この人の子は、自分に声を掛け、しかも何の躊躇いもなく、炎の如く熱を発する自分の体に平気な顔で触れて来るのだ。

『へえ、そうなんだ。私からしたら、君はただの綺麗な鳥にしか見えなけれど』

空を見つめていた瞳が、ガルダを映す。情けないが、彼女にその目を向けられた瞬間、たじろいでしまった。——ぞつとするほど、空っぽの瞳をしていたから。しかし、それは一瞬のことで、すぐに自分の見知った光を宿した瞳に戻る。

『御前は肝が据わっているな』

『そうでもないよ。たまに、君のその黄金の瞳が、怖いと感じるときも

ある』

じつと、彼女が自分を見つめる。随分と素直に物を言ってくるな……そこが、彼女の美点でもあるのだが。

『己も、御前のその碧の瞳が恐ろしいと感じてしまうときがある。まっすぐで、何もかも見透かしている。そんな目だ』

あえて、空っぽの瞳だとは言わない。彼女は時に、他の人間が言葉を発していなくとも、その心情を見抜くのだ。だから、己の言ったことはあながち間違いではない。神鳥である自分も、不思議とこの人の子に心の内にある感情を見抜かれている気がしてならないのだ。

『神様に、恐がられる様な目はしていないと思う……』

そう言つて、少し落ち込んでしまった彼女。すまない、と言つて灰色の頭を撫でる。すると、驚いたようにこちらを見て、照れ臭そうに俯いてしまった。

『びっくりした……君の手が、あまりに暖かいものだから』

『そうか？御前の体が冷たいからだろう』

頭を撫でていた手を、彼女の頬に当てる。ひんやりと、冷水に浸っていたかの様に冷たい。母と、千匹のナーガたちと行った、海底に潜む竜王の都の薄暗い冷たさを思い出す。

——ガルダ、彼女をお願まもいね。あの子、酷く優しい子だから。

ああ、そうだな。己はこいつを護らなければいけない。だって、こんなにも脆く、儂い存在なのだから。

——小さき友よ、御前をどこまでも己は見守ろう。

競技会の次の日、パラシユラーマにこれでもかというほど、手合わせで扱かれたシャストルラ。どうやら、昨日鬼ごっこをしなかったツケが今日に回ってきたようだ。

「あー。どうせなら、昨夜鬼ごっこをしていたほうが、まだ良かった気がする……」

『まあ、そう言うな。これからまた町に行くのだろうか？』

「うん。気分転換に」

『近くまで送っていくか?』

「お願いするよ」

『承知した』

昨晚とはうって変わって、鳥の姿に成っていたラクタパクシヤ。その背に乗って、町の近くまで行ってもらい、そこから歩いて町に入る。昼の町は人に溢れており、とても賑やかだ。……軽く、人酔いをしてしまったが。

ふらふらと一人、町をぶらつく。すると、どこかから金属同士がぶつかる音、矢が空気を裂く音が聞こえてきた。訓練場でも近くにあるのだろうか。興味本位で、音のする方へ行ってみる。

「……………」

覗いてみると、男の人たちが一生懸命に武術の訓練をしていた。やっぱりここは訓練場らしい。ウズウズと血が騒ぐ。飛び入り参加は、しても良いのだろうか。

「そこで、何をしているのですか」

「っーびっくりした。いや、ただ彼らの様子を見ていただけです」

油断していたせいか、後ろから近づいてきた気配に気づかなかつた。思わず飛び上がってしまうのも無理はない。後ろを振り向くとそこには、目を丸くしているアルジュナが立っていた。

「貴方は、昨日の……………」

「はい。競技会に飛び入り参加した者です。昨日は無礼な行為をしてしまい。申し訳ありませんでした」

「いえ、そんなことは」

私が謝ると何故か口ごもる彼。……私、アルジュナに何かしたっけ?訝しげな顔で彼を見上げる。その整った顔は困惑した表情を浮かべていた。

「どうかしましたか」

「……失礼ですが、近くでみると、その、とても弓を引いて的を破壊できるといふ人物には見えなかったのです」

「なるほど?」

なにさ、君も私が華奢で細いと言いたいのか。そして、ドウリーヨ
ダナと似たようなことを言わないで欲しい。

「それで、貴方は何故ここに？」

「町を歩いていたら、金属のぶつかる音が聞こえてきたので。気に
なつてここに来ました」

「そうですか。もしよければ、貴方も参加してみますか？」

「え、いいんですか？」

アルジュナの言葉にパツと顔を明るくする。あ、でも昨日の様子を
考えると、身分とかそこら辺は大丈夫なのだろうか。というか彼、今
から訓練に参加するんだね。

「ええ、この訓練場は全ての者に開かれています。……それに、昨日の
競技会で貴方は「剣が得意」と言っていたでしょう？その腕を見て
みたいと思ひまして」

「そういうことですか。以外ですね。てつきり、弓の腕を見たいと言
われるのかと思つたのですが」

「確かに、弓の腕も気になります……」

若干、遠い目をしながら言うアルジュナ。昨日のことを思い出して
いるのだろう。うん、言いたいことは分かるよ。

「えっと、すみません。とりあえず、中に入りましょう」

「そうですね」

では、お先にどうぞ。と彼は言う。あれ、そこは自分が先に入ると
こなのでは？私、一応部外者なのに……。不思議そうな顔をしている
と、彼は「私が先に入ってしまうと、貴方が入りにくくなってしまう
ので」苦笑してそう言ってきた。ああ、なるほど。彼は人気者だから、
人だかりができてしまうのか。

じゃあ、遠慮せずに先に入ってしまうおう。「失礼します」と小さく呟
いて入る。キョロキョロと辺りを見回してから、すぐさま隅っこに避
難をした。

私の後から、アルジュナが入ってくる。すると、訓練場にいる人々
は一斉に彼を見て、歓声を上げた。まるで、アイドルのコンサート
ようだ。幸い、私が入って来たのを誰も気づいていない。なので、無

駄な注目を集めずに済んだのだが……些か、これはひどすぎると思う。もちろん、いい意味で。

人に囲まれている彼はというと、につこりと完璧な笑顔で周りに対応している。私は表情筋が滅多に働いてくれないので、あんな笑顔を作ることはできない。少し、痛々しい感じがするが、きつと周りの人たちはそんな事に気づいていないのだろう。

ブーツと、その光景を見ていると「ポンツ」と誰かに肩を叩かれた。振り向くと深い智慧を宿した瞳を持つ一人の男がそこにおり、人懐こい笑顔を浮かべて私に話し掛けてきた。

「やあ、君は昨日の競技会に来ていた少年だね？」

「はい。そうですけれど……」

「まさか、こんな華奢な体つきをしているとはね。ちゃんと食べてる？」

「食べてますよ。失礼ですね。あなたもドウリーヨダナ様と同じ事を言うのですか——ユデイシュテイラ様」

「あ、僕のこと知ってるんだ。それにしても、あのドウリーヨダナも僕と同じ事を言っていたのかい」

意外そうに、そう言って驚く彼——パーンダヴァの長兄、ユデイシュテイラ。それにコクリと頷けば、珍しいことを聞いたとでもいうように、目を見開く。

「へえ、そうなんだ。で、君の名前は？」

「シャストルラといいます。と、言ってもこれは師から貰った仮名ですが」

「小刀、ねえ。僕の名前は君が知っているとおり。パードウが長男、ユデイシュテイラだよ。よろしくね」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

礼儀正しい子だなあ、と感心したように言う彼。いや、全然。全く礼儀正しい子ではないと私は思う。だって、礼儀正しければ、競技会に乱入しないでしょう。普通。なんか、見た目に反してすごいフワフワした人だ。

ざわざわと、彼と話している内にアルジュナの周りにいた人ばかり

は散っていた。彼は「あ、アルジュナ。こつちだよ」と手招きをして、アルジュナをこちらに呼び寄せる。

「兄上、来ていたのですか」

「うん、大分前からね。そう言えば、シャストルラ。彼には挨拶した？」

「いえ、まだです。名乗るのが遅くなりました。師から貰った仮名ですが、シャストルラといいます」

「シャストルラ、ですか。私の名はアルジュナといいます」

よろしくお願いします。と再度、挨拶をする。ユディシユティラはそれを、親が子を見守るかのような優しい目で見ていた。

「意外だね。アルジュナが他の人を誘ってここに来るなんて」

「……見ていたのですか」

「いや、ここから偶々見えたただだよ」

悪戯っぽく笑うユディシユティラ。一方、そんな彼を見て、溜め息をつくアルジュナ。こうみると、普通の兄弟にしか見えない。だが、彼らは神の血を持つ半神半人なのだ。

「ところで、シャストルラは何が得意なの？」

「私は剣が得意ですが……昨日、言ってませんでしたっけ」

「ごめん。僕の中での君の印象は『弓での的を破壊した』ということしかなくて……」

「すみません。私の兄上が失礼なことを言って」

「いや、気にしてないので大丈夫です」

「そうですか。ならいいのですが……」

不安そうに、こちらを見るアルジュナ。何故そんな目でみるのか。私、そんな師匠ほど心狭くないよ。クシャトリヤだからって、理不尽に怒らないから。……多分。

「じゃあ、僕と手合わせしようよ」

「えっ。ユディシユティラ様とですか？」

「様、は付けなくていいよ。言いつらいでしょう?」
「でも、」

「いいから。ね?」

「アツ、ハイ」

「……兄上。貴方という人は」

有無を言わささない圧力だった。アルジュナは兄の言葉に呆れている。ドウリーヨダナはまだ良いとして、彼はあれだ。おおらかな人故に、無言の圧力が強い。……さすが正法ダルマの子。

結局、その後。彼と手合わせをすることになったのだが、何故か私
が勝ってしまった。あれ、私、ただの人間なんだけど。「華奢なのに
……どこからそんな力がでるの……？」地に膝をついて、言っている
彼。華奢言うな。

「逆に聞きますが、何で私よりも力が弱いんですか」

「僕は頭脳派だから……。自分の非力が憎い」

「（それは、言い訳なのでは……？）でも、あなたも強かったです」

「本当？」

「嘘は極力言わないようにしているので」

そっかあ、と気の抜けるような声で言うユデイシユテイラ。アル
ジュナはそんな様子 of 兄を見て、一言いった。

「まさかとは思いますが、兄上。貴方、全力を出し切って負けたという
わけではないですよね？」

「確かに……ユデイシユテイラ、あなたは私に手加減をしていました
……よね」

「えーっと……」

目が凄い勢いで泳いでいるユデイシユテイラ。え？まさかあれが
本気なの？嘘だよ。手加減してたんだ……よね？そうだ。そうだ
と言ってくれ。じゃないと、私が君の弟たちに扱れる。例えば、目の
前にいるアルジュナとかに。

「だって、しようがないじゃないか！僕が得意なのは戦車の扱いなん
だし!!」

「じゃあ、何で意気揚々と私と“剣で”手合わせをしようと思ったん
ですか？」

「それは……ね。正直に言うと、舐めてました。すみませんでした」
「……………」

「……………」

「ふ、二人とも。何で無言で睨むの」

慌てるユディシユテイラ。そんな彼を私とアルジュナは凍えるような冷たい目で見ていた。

3章 王族の花 カリ・ユガの陰謀

競技会があつてから、私は町へ行くことが多くなつていた。といっても、一ヶ月に一回行くか行かないかぐらいの頻度だけれど。普段は森で昔からやっているように、鍛練を積んだり、動物たちと過ごしたりしている。

ある日、ラクタパクシャが珍しく人の姿で私の元にやつて来た。その端正な顔は、不機嫌そうに歪んでいる。またナーガたちと言いつい争いをしたのだろうか？にしては、やけに静かだ。なにか別の、彼にとつて不快なことがあつたのだろうか。

「どうした、なにかあつた？」

「……いや、別に。大したことではない、御前はおまえ気にするな」

「気にするな、と言われてもねえ。そんな明らかに『不機嫌です』つて顔をされたら、気にするよ」

「……………」

私が聞いても、彼は沈黙を保つたままだ。こうなったら、彼は梃子でも動かない。

「ハア、じゃあ言わなくてもいいよ。なんとなくだけど、察しが付いた——何か、見たんでしよう」

「っ！御前は…………」

驚いたように、目を見開くラクタパクシャ。大抵、彼が話さないときは私に関係がある人物に何かあつたときだ。だからか、とても分かりやすい。じつと、その金の瞳を見つめていると観念したのか、彼はポツリ、ポツリと話しはじめた。

「……昨夜、ヴァーラナーヴァアの町外れにある豪邸が炎上しているのを見た」

「最近できた、あの屋敷か。『祝福の家』だっけ」

それで？と先を促す。ラクタパクシャは一瞬、言おうか迷つたのか言葉が詰まつたが、苦虫を潰したような顔をしながら、話してくれた。

ドリタラーシユトラは知らせをくれた使いの者に、静かにそう言った。側に控えていたビーシユマやドローナたちは、悲しみに声を上げて泣いている。

——パードウ一家が、焼け死んだ。

あの、市民や兵たちに慕われていた母子が、死んだ。その悲報は城中を駆けめぐり、ドウリーヨダナとカルナの元にもやって来た。

「計画は成功したのか」

「ああ、見事成功したさ！まさかこんなにもうまくいくとはな!!」

満面の笑みでカルナに言うドウリーヨダナ。シヤストルラの予想通り、今回の事件は彼が仕組んだことだったのだ。麻と樹脂、そしてその他燃えやすいものをふんだんに使い建てられた屋敷は、彼の思惑通りに昨夜、盛大に燃え上がった。それを知ったドウリーヨダナは今にも躍りだしそうな勢いで、カルナに話し掛ける。

「なあカルナ。お前はと思う？あのパードウ一家が焼け死んだと聞いて」

「……そうだな。オレはあの一家が簡単に死ぬとは思えない。母親以外皆、半神だからな」

冷静にそう指摘するカルナ。確かに彼らは半人半神だが、ドウリーヨダナはムツとした顔で口を開いた。

「半分神の血が流れているようだが、人にはかわりないだろう。お前の言うことは一理あるが」

仮に生きていたとしたら、パードウ一家は一体どこに消えたのだろうか。そんなことを考えても、答えなど一向に出てこない。ドウリーヨダナは溜め息をつくが、とりあえず、この喜びを友と一緒に噛み締めることにした。

しかし、彼はまだ知らない。その後に行われる国王ドウルパダによる花婿選^{スヴァヤンヴァラ}びで、パードウ兄弟が現れ、花嫁のドラウパディーを勝ち取って行くことを。

嵐前の静けさ

パードウ一家が姿を消してから何カ月かたったあと、シヤストルラは久々に町に来ていた。というのも、あの騒動があつたあと、一度だけ町の様子を見に行つたのだが、それまであつた活気が嘘のように消えて無くなつていたからである。沈痛な雰囲気が漂う町は、パードウ一家が生きていると知っているシヤストルラにとって、息が詰まるような居心地の悪さを感じさせた。

それ以来、町に行くことはなかつたのだが、ある日たまたま町の近くを散歩していたときに、カルナと会つた。彼はどうやら弓の鍛練をしていたらしく、その手には弓が握られている。私は、まさかこんなところで会うとは思ひもしなかつたので、思わずぎよつとした様子で彼を見てしまった。一方のカルナといえば、表情こそ変わつてはいないが、何か珍しいものをみたかのように、目を微かに見開かせている。「お久しぶりです。元気にしていましたか？」

「何も変わりはない。お前はどうか」

「こちらも相変わらずです」

「そうか」

彼の言葉を最後に短い会話が終わる。今更だが、何故か彼と話すものの数分で会話が途切れてしまう。私はどちらかという口下手なほうで、普段から話している師匠やラクタパクシヤならともかく、こうも久しぶりに会つた人物と話すとき、謎の緊張感に襲われる。例えるのなら、入試で行われる面接。何を聞かれ、何を話さなければならぬのか分からないために極度に緊張してしまう。そんな感じだ。「えっと、ドウリーヨダナは元気ですか」

苦し紛れに、そう話を切り出す。話題が見つからないので、とりあえず彼の親しい人物について聞いてみることにした。

「ドウリーヨダナか、いつも通りだが最近はずかされてるな。近頃、パUNCHャーラ国でドウルパダによる花婿選びが催されるらしい。恐らく、それが原因だろう」

「そうなんですか」

花婿選び、かあ。何か面倒事が起きそうなイベントだよ。私は気になって、具体的な内容をカルナに教えてもらおうと、なんとまあ普通の人間には無理ゲーだろうと思ってしまうぐらい、ハードな内容だった。

「誰も引くことのできないと思われる剛弓こうきゆうを引き、空中高く浮かぶ的を射る」

それさ、絶対半神半人か人間卒業してしまった聖仙せいせんか武人を対象にしているよね。ノーマルな人間はまず無理だよ。そんな内容にしたドウルパダは一体何を考えているのやら。

「それって、ドウリーヨダナやあなたは参加しないんですか？」

「参加はする事になっている。お前は行かないのか？」

「私ですか……うーん、特に興味はないので行くとしたら見学だけですかね」

それに私、女なんで。と心の中で呟く。カルナは未だに私のことを男と勘違いしてくれているらしく、この話に興味を示さなかった私をまた、珍しいものを見たかのように目を微かに見開かせて、しげしげと見てきた。

「……ドウリーヨダナは『シャストルラもあんな華奢だが、一応男だからこの話に食い付いてくるだろう』と言っていたのだが、その予想は見事に外れたようだな」

「え、そんなことを言っていたんですか。あの人」

「ああ。この花婿選びの話題が出たとき、『剛弓を引かせるのだったら、シャストルラが適任だろうな』と言っていた。ついでに、もし会ったら参加をしてみないか誘ってみてくれとも頼まれた」

「要するに、ドウリーヨダナの代役とかで出て欲しいと。そんなにお嫁さんが欲しいんですか。代役なら、カルナでも良いでしょうに」

細身だけれど、十分に技量はあるんだし。というか、さらつとまたあの悪人は私のことを「華奢」と言いやがって。ユデイシユテイラみたいに、剣でフルボッコにしてあげようか？勿論、ある程度手加減するけれど。

「あの男には、あの男なりの考えがあるのだろう」

「私には、その考えがよく分かりませんが。とりあえず、花婿選スウアヤンウアラびには参加しません。観には行きますが」

「承知した。ドウリーヨダナに伝えおこう」

「ありがとうございます」

彼に向かつて、一つ礼をしてその場で別れた。こんなやり取りがあつたことで、私は今町にいるのだが猛烈に叫びたい衝動に駆られていた。何故なら――

「何で、王族が、護衛も付けずに、町を出歩いているんですか!？」

「おいやめろ。そんなでかい声を出すな。周りに気づかれるだろう」

「ドウリーヨダナ、だから言つただろう」

「護衛なら我が友であるカルナ、お前だけで十分だろう?」

「十分だろう? じゃない!!」

いつの日かのように、王族もといドウリーヨダナがカルナと共に町を歩いてきたからである。なんなの、カウラヴァ兄弟は一人歩きが好きなの? ドウフシャーサナはともかく、ドウリーヨダナはまだカルナと一緒にいるからマシだけれど。

「まあ、落ち着け。お前と町で会えるとは思っていなかったからな。

おかげで探す手間が省けた」

「私を探していたんですか?」

「この間、お前が言つていたことをドウリーヨダナに伝えたのだが……」

気まずそうに、私から目を反らすカルナ。……うん、何となく察したよ。どうせ、駄々を捏ねたんだよね『参加してもらいたい』つて。何となくだけど、そんな感じがする。

「お前、仮にも男だろう。何で花婿選びに参加しないんだ。剛弓を引くなんて、お前にとって余裕だろうに」

「君は私のことを何だと思つているんだ。流石に剛弓を引くなんて無理だし、そもそも花嫁とか興味ない」

「興味があるかないかはともかく、やってみないと分からないだろう」

「じゃあ、仮に弓を引けたとしよう。相手の花嫁はこんな薄汚いやつを婿にしたいと思う? 第一、花婿選びだつてその花嫁の父親が『自分

の娘を自分が気に入った若者にやりたい』とかいう理由で開かれてい
るようなものでしょう」

「確かにそうだが、いくらなんでも自分の評価が低すぎないか」
「低くない。普通ですが何か？」

私は真顔で言い切った。すると、「ああああ！もう分かった、分かっ
たからそんな顔で言うな！」と言って何故かドウリーヨダナが頭を抱
えてしまった。それを見てカルナは感心したように一言。

「流石だな。あのドウリーヨダナをここまで論破できるとは」

「別に、論破をしたつもりはないんですけど……」

不思議に思っ、首を傾げる。彼の湖面のように静かな瞳は、珍し
く優しい瞳をしていた。なんというか、親が子を見守るそれに似てい
る。こんな目もできるんだと彼を見返していると、ドウリーヨダナが
「おい」と声を掛けてきた。

「お前が参加しないということとは分かった。でも、スウアヤンウアラ花婿選びは観に来
るんだらう？」

「まあ、観には行くね」

「だったら、俺たちと一緒に行かないか？」

「え、別にラクタパクシャに送ってもらおうから、大丈夫だよ」

「俺たちと一緒に行けば、特等席で観られるが」

えー、どうしよう。別に一緒に行ってもいいけどなあ。流石に初日
から行ったら、終わるまで帰れないし。十六日間も戻らないとなる
と、師匠からOKが出るかどうか……。ラクタパクシャと一緒に行く
んだったら大丈夫だろうか。

「……一応、師匠に聞いてからでもいい？」

「ああ、大丈夫だ。都合がよかったら当日、町の入口に来てくれ」

「了解。気をつけて帰ってね」

「カルナがいるから大丈夫だ」

「お前も、気をつけて帰れ」

「ありがとう。じゃあね」

踵を返して、私は住み慣れた森に帰る。彼らと一緒に行くかは、師
匠に許可をもらってからだな。あと、ラクタパクシャも一緒に行つて

くれるだろうし。

「……でも、なんでこんなに嫌な予感しかしないんだろう」

森の帰り道、まだ日が高いはずの林道は薄暗く、生暖かい風が彼女の頬を撫でる。その風に揺れ動く木の葉の影は蛇のように滑らかに地面を滑っていた。

パンチャールラ国にたどり着いたパーンドウ一家は、目立たぬように壺作り人の粗末な家の一隅を借り、バラモンを装って、毎日托鉢たくはつに出掛け町の様子をそれとなく見回っていた。

「どうやら、明日から花婿選スヴァヤンヴアラびが始まるらしいね」

アルジュナと共に托鉢に出掛けているユデイシユティラは、周囲の様子を見ながらそう言った。パンチャールラの都は活気に満ちており、道を行く人びとは明日が楽しみだともいうように、張り切って店の準備などをしている。

「そうですね。ところで兄上、母上の調子はいかがでしようか」

「長旅で相当疲れているようだよ。今はビーマ、ナクラとサハデーヴァと一緒に休んでいる。特にビーマは僕らをずっと担ぎっぱなしだったからねえ、元氣そうに見えても、疲れきっているだろう」

沈んだ表情で、ユデイシユティラはアルジュナに話す。兄弟の中で一番強靱な肉体を持つビーマは道中、人喰鬼のラクシャサを倒したり、皆が疲れて歩けなくなったときには全員をその大きな体で担いで、長い距離を歩いてくれたのだ。

「そうですね……早く、安心して暮らせるようになればよいのですが」

ユデイシユティラの言葉に、アルジュナも頷く。ひとしきり托鉢も終え、皆がいる家に戻ろうとするが、一瞬サツと黒い影が彼らの上を飛んでいった。何だろうと思い、二人は空を見上げるが、そこには雲一つない空と、燦々と輝く太陽があるだけだった。

「今、何か私たちの上を飛んでいきませんでしたか？」

「……うん、何か飛んでいったね。鳥かな？」

不思議そうに、首を傾げるアルジュナとユデイシユテイラ。彼らの上を飛んでいったものの正体は、シヤストルラにお願いされてパーンドウ一家の様子を見て来ていたラクタパクシャなのだが、二人はそのことを知るよしもない。

——花婿^{スウアヤンウアラ}選びまで、あと少し。

絢爛なる花婿選び

豪華絢爛な装飾に包まれ、芳しい花の香りが一面に漂っているパンチャールラの会場の一角、無事にパラシユラーマからドウリーヨダナたちと一緒に遠出をする許可をもらい、祭の最終日まで残っていたシャストルラは、いつも纏っている外套のフードをよりいっそう深く被り直していた。人が多いせいか、それともこの甘ったるい香りが鼻に付いているせいなのかは分からないが、もとから白い肌がよりいっそう白くなり、まるで幽鬼のような青白い顔色になっている。

「大丈夫か？ 顔色が随分と悪いが……」

「これが大丈夫に見える？ 全然、大丈夫じゃない」

「高いところが苦手なのか」

「そういう訳じゃないんだ……ただ、この人の多さと無駄に芳しい花の香りがね……」

若干、死んだ魚のような目をしながらカルナにそう答えるシャストルラ。競技会ぐらいの人の多さならまだしも、こんなうじゃうじやと蟻のように大勢の人がいる場所は来たことがない。おまけに、何種類かの香水を一気に混ぜたような臭いが漂っている。それが原因で気分が悪くなるのに拍車がかかっているのだ。

今はカルナと一緒に比較的マシな二階にいるのだが、もうすぐ花嫁ドラウパデーイが晴れ姿で現れるので、嫌でも下に降りなければならぬ。一応、ドウリーヨダナとカルナの護衛ということになっているため、側に控えていなければいけないし、ラクタパクシャは何故か一緒に来てくれなかったし……。もう本当に、いろいろと辛い。

「無理をしなくても良いとオレは思うが、お前はそれでも行くのだろう」

「当たり前だよ、もし何かあつたら大変だし」

はあ、と深い溜め息をつく。パンチャールラに来る前からそうなのだが、どこことなく嫌な予感がする。自分に関することならまだいいが、他の人に関するかもしれないので、注意をしておいて損をすることはないだろう。それに、気分が悪かろうがなんだろうがどのみち下

に降りなければならぬ。

重い足取りでカルナと共に、一階のドウリーヨダナが座っている場所に歩を進める。その際にすれ違ったバラモンの集団の一人と目が合ったが、それは一瞬のことですぐにファイと目をそらされてしまった。何処かで見えたことがある黒曜石のような、綺麗な瞳だった。

「……………やっぱり、気のせいかな」

「どうした。もうすぐスヴァヤンヴァアラが始まる」

急に歩みを止めたシヤストルラを振り返り、急ぐぞと言って彼女の腕を掴んで人混みを掻き分けていくカルナ。いきなり力強く腕を掴まれたシヤストルラはというと、されるがままに彼に引きずられて連れていかれていく。

「え、ちよ、待つて。わかつたから、そんなに強く引つ張らないで！腕が折れる！」

「すまない。だが、ここで腕を離すと人混みに飲み込まれる」

淡々と、そう返すカルナ。例えシヤストルラが人混みに飲み込まれても、彼の黄金に輝く鎧は目立つのではぐれる心配はないのだが、彼女の腕を離すつもりは微塵もないらしい。

そんなやりとりをしている二人をぼろ布を纏った一人の少年が雑多に紛れてじつと見ていた。先ほど、シヤストルラと目が合ったバラモンだ。その漆黒の瞳には驚きと、微かな敵意が浮かんでいる。

「やはり、あの者たちも来ていましたか」

ポツリと、小さく呟く。その言葉はすぐに周りの雑音に掻き消えるが、唯一隣にいた青年だけには聞こえていた。

「どうした。誰か見知った人でもいたの？」

「はい、先ほどカルナとシヤストルラが近くに、今はいませんが」

「あー、あの二人ねえ。ということは、ドウリーヨダナもこの場所にいるのか」

うーん、気が滅入るなあと困ったように言う青年。その薄汚れた格好には似合わぬ、どこことなく育ちのよさを感じさせる彼は、少し考え込んだのちに開き直るようにつこりと微笑んだ。

「まあ、なるようになるさ」

のほほんとした様子で、そう言い放った青年。そんな彼を少年はああ、やっぱりかと呆れたような目で見ていた。

目も覚めんばかりのきらびやかな衣装、燦然と輝く宝石、それらで身を飾った花嫁ドラウパデーは花婿に供える花輪を黄金の盆に捧げ持ちしらずと壇上に上がった。

しんと静まり返っている会場の中央。そこにドラウパデーの兄、ドリシユタドウユムナが己の最愛の妹の手を壇上から引いて登場し、割れんばかりの大声で宣言をした。

「花婿候補の諸君、見よ、これなる弓矢を！これを使いかの標的を射落されよ。見事的を射た者こそ我が妹を勝ち取り、妻としようのだ!!」

更にドリシユタドウユムナは、候補者として名乗り上げた者たちの名を次々と高らかに告げる。ドウリーヨダナをはじめ、ドウフシャーサナ、ヴィカルナ、ユユツなどカウラヴァ兄弟中の猛者、他にカルナ、シヤクニ、ヤーダヴァ族の王など数多くの強者がいた。

「以上の者が、この花婿選^{スヴァヤンヴァラ}びの参加者である。諸君の健闘を祈ろう」

その言葉を最後に、いよいよ競技が開始され、勇んで台に置かれた弓を手にした貴公子たちは、その強固な弦を引くことすらできず肩を落として自分の席に戻っていく。みな歯を喰いしぼり、凄^シい形相で弓に立ち向かうのだが、結局力尽き、よろよろと地面に座り込んだり、地べたに倒れて暫く起き上がれなくなるのだ。誰も彼も鋼で作られたかのような硬さを誇る弓に翻弄され、衣服は乱れ、無念の叫びを上げる。まるで、敗戦した戦士の霊がこの世に舞い降りてきたかのような散々たる様だった。

（まあ、こうなるよね。元々、只人に引かせるつもりはないんだし）

シヤストルラは、静かにこの惨状を見てそう思った。先ほど席に戻ってきたドウリーヨダナもそうだが、いくら優れた武人であれども、あの頑丈な弓を引くことは敵わなかったのだ。一体、国王は誰と娘を娶合わせたいのだろうか。弓を引ける条件がただの人間以上の

強さを持つ人だということが確實なのは目に見えているが。

悶々とシヤストルラが思考に耽りはじめたとき、隣に待機していたカルナが悠然と広場の中央に進み、剛弓を手にした。ゆつくりと弓に矢をつがえ、誰も引けなかったその鋼の弦を普通の弓弦のように引き絞り、^{スィータ}的を射ぬこうとしたのだが――

「あの御者を夫にするのは嫌です！彼を夫にするくらいなら、私はずっと独り身でいたほうがましです」

突然、ドラウパデーイがそう叫んだ。その声を聞いたカルナは微かに苦笑し、ドウリーヨダナは憤慨する。一方、己の思考に浸っていたシヤストルラは、その声ではじめてカルナが中央に行き、弓を引き絞っていたのに気づいた。

「ふざけるな！我が友を侮辱することはたとえ女だろうが許さんぞ」

「ドウリーヨダナ、少し落ち着こうか」

「シヤストルラ、お前は何とも思わないのか？誰も引くことのでなかった剛弓を唯一、引き絞った男がだ。御者だからという理由で拒絶されたんだぞ?!これは侮辱という以外の何ものでもないだろう！」

宥めようとしたシヤストルラに掴みかかる勢いで、ドウリーヨダナは怒鳴り散らす。彼女はそれに怯むことなく、ただ静かに彼の目を見据えて口を開いた。

「確かに、君の言うとおりだよ。彼女の――ドラウパデーイの言葉は侮辱以外の何ものでもない。」

でもね、と彼女はドウリーヨダナに言い聞かせるように一旦、言葉に合間を置く。

「彼女には、彼女の気持ちがあるように、君には君の、彼には彼の気持ちがあるでしょう？彼女が彼を夫にしたいくないのは身分が低いからというのもあるからだと思うけど、単に彼女がカルナのことを好ましく思っていないからかもしれない」

「……………」

「彼女は彼のことをよく知らないだろうし……けれど、君はカルナのことをよく知っている。良いところも悪いところも含めて。だから、憤りを感じるのはあたりまえのことだと思う」

だんだんと、落ち着いてきたのかドウリーヨダナは静かになってきていた。そんな彼の様子を窺いながら、シヤストルラは話続ける。

「まあ、結局私が何を言いたいのかというのと、彼女に思うことはあるけれどフラれちゃった仕方がないということかな。本音を言うと、あんな人にカルナを媚にあげるのはもったいない。他にいい人がいると思うから、是非ともそちらをおすすめてほしい」

「シヤストルラ……お前ってやつは……」

思わず彼女に抱き付いて感動するドウリーヨダナ。そうだよな、やつぱりそう思うよなと繰り返し呟いている。彼に抱き付かれたシヤストルラはうつ、と少し苦しそうに顔を歪ませて広場の中央にいるカルナに助けを求めた。

「カルナ……助けて、窒息死しそう」

「ああ、分かった」

カルナは彼女の言葉にフツと笑い、太陽を一瞬見上げてから、力一杯引き絞っていた弓を元の台に置き戻し、ドウリーヨダナたちのところへ戻って行った。

続・絢爛なる花婿選び

「やっぱり、カルナ以外まともに弓を引ける人はいないか……」
「まあ、そりやそうだな。あんな剛弓、引けるやつなんて滅多にいないだろう」

カルナの挑戦が終わったあと、他の国々の王が挑戦をするも、やはり力及ばず、へなへなど地面に膝をついたり、屈辱に耐えきれずに自分の国へ帰ったり……。シヤストルラとドウリーヨダナは、数多くいた花婿候補の強者たちがいつの間にか数を減らしている広場を見て、しみじみとそう話す。

そんななか、一人のバラモンが観客席からすくつと立ち上がり、広場の弓に歩み寄る姿が観衆の目に写った。その凛々しい姿に意気消沈しはじめていた人々は固唾をのみ、割れるような歓呼の声を上げ、バラモンの長老たちはクシャトリヤも及ばぬ力業にバラモンが立ち向かうとは大した男だと、拍手喝采して声援を送り、一気に騒がしくなる。

しかし中には、あれほど名高い武人たちでさえ弓を引けずに退散したというのに、細腕のバラモンごときに何ができるのだと馬鹿にする者や、それに対して、バラモンであるパラシューラマはかつて二十一回もクシャトリヤを地上から殲滅させたことがあるではないか、もしかしたらあの少年も凄腕の武人かもしれないと言い反論をする者もいて、会場は真つ二つに割れていた。

しかし当の本人は人々の喧騒を気にせず、落ち着き払った態度で広場の中央に進み出て、弓を持ち上げ矢を手にする。あれほど名だたる武人たちを苦戦させた剛弓は、嘘のようにカルナ同様、彼の手によって軽々と引き絞られ、次の瞬間目にも止まらぬ早さで矢が飛び出し、的を射落していた。

——カラン

木の破片が落ちる、軽い音が静まり返った会場に響く。暫くその音の余韻に浸っていた群衆が割れんばかりの物凄い歓声を上げ、狂喜乱舞しはじめた。バラモンは喜び、クシャトリヤたちは無念の涙を流し

たり、口惜しげに舌打ちをしたりと、さまざまな反応を見せるなか、何百という楽師と聖歌隊は妙なる調べで見事偉業を成し遂げた英雄を誉め称えている。

会場が興奮につつまれている最中、集団に混じっていたとある二人のバラモンが広場をあとにしようと、こつそりと出口に向かっていった。少年もそのあとを追おうと駆け出そうとするが、ドラウパデーイがそれを止めて少年に花輪を捧げる。晴れて彼は、彼女の花婿に選ばれたのだ。

それを見たバラモンたちは王と共に敬意を表し、祝福をするが、集まった王族たちは承知せず口々に怒りをぶちまけていた。

「遙々遠い地から馳せ参じた我々クシャトリアを無視して、どこの馬とも知れぬバラモンの若僧に娘をくれてやるとは何ごとだ！」

「そうだそうだ！元を言えば、スヴァヤンヴァラはクシャトリアの行事であつて、バラモンなどが参加する資格はない。これはクシャトリア全体に対する侮辱だ！」

激昂した王たちは武器を取り、ドラウパデーイの父であるドウルパ大王に向かって襲いかかろうとする。しかし、咄嗟に少年と二人のバラモンが王の前に立ち、ある者は大木を引き抜いて身構え、ある者は弓を構えて、彼らを返り討ちにしていった。

「おい、シャストルラ。カルナはどこに行つた！」

この騒動を見ていたドウリーヨダナは、ふと己の親しい友が先ほどから姿が見えないことに気付き、声を張り上げてシャストルラに聞く。

「弓を持っていた少年を追いかけてどこかに行つてたけれど」

「嘘だろ……。ええい、仕方ない。俺はあの太木振り回している奴の方に行つてくるから、お前はカルナを探しに行け！」

どこかげんなりとしているシャストルラが普段は出さないのであろう、大きな声でドウリーヨダナに伝えたのだが、それを聞いた彼は、いつの間にか用意していた愛用の棍棒を手にして意気揚々とそう告げて、乱戦の地に赴こうとする。しかし、それをシャストルラは慌てて止めた。

「ちよつと待つて、ドウリーヨダナ。あの神話戦争みたいな中に行つてくるの?!」

彼女がそう言つて指差す広間は二人のうち、一人の大柄なバラモンが大木を振り回すことでまるでそこに台風があるかのような、凄まじい風が吹き荒れている。彼の回りに群がる王族たちは木の葉の如く軽々と吹き飛ばされており、皆地面に這いつくばっていた。

「ああ、そうだ。何だかあのバラモンを見てみると、ビーマを思い出してな……何故か一発殴らないといけない気がする」

「そんな理由で?!というか私、カルナを見つけられたとして、戦つてたら止められる自信ないんだけど!」

「お前ならできる……多分な」

「うわあ、凄い不安になる言葉……」

ガクツと肩を落として言うシャストルラ。ドウリーヨダナはそんな彼女の肩にポンと手を乗せて「まあ、精々頑張れよ」と言い残し、サツと乱戦の中に飛び込んで言つてしまった。

「ええ!……」

ポツンと一人取り残されたシャストルラ。しょうがないなあと溜め息をつき、仕方なくカルナを探しに行くことにした。だっ広い広場をとぼとぼと歩いてみると、

——ヒュン

鋭い、何かが風を切る音が聞こえた。それを頼りに向かつていくと、広場の中庭が見えたので、柱からこつそり覗くと——そこにはまたさっきの神話戦争のような鬨が繰り返られていた。

カルナが矢をつがえ、それを勢いよくバラモンの少年に向かって放つ。少年はそれを同じく放つた矢で相殺し、相殺しきれなかった矢は素早く避けて対応し、空きあらばカルナに矢を数本同時に射ち、反撃をする。

よく見ると、二人の回りには矢が落ちており、自分が来るまでの間よくこんな量を撃てたなどシャストルラが思わず引いてしまうほど、大量の矢が散らばり落ちていた。中には壁に突き刺さっているものもある。彼らが放つ矢はまるで隼の如く相手を正確に狙い射つてお

り、シヤストルラは到底カルナを止めに入るところか、二人の間に割って入ることもできない。

(どうしようかなあ。二人とも戦うこと夢中だし……というか、この中に入って行きたくない。切実に)

私、ただの人間。と心の中で呟くシヤストルラ。しかしドウリーヨダナに頼まれた以上、行かなければならない。腹を括り、矢の量が比較的減った瞬間を狙って二人の間に割って入ろうと決め、ただひたすら、その瞬間が来るのを待つ。

数分たったのち、カルナと少年が同時に矢を放った。連続で放っているが、捌ききれない量ではない。今が好機と彼女はその両手に抜き身の片刃刀とその鞘を持ってすかさず二人の間に割って入り、瞬時に矢を打ち落とし、それを見事防いだ。

「二人とも、弓を下ろして」

シヤストルラは無事に二人の間に割って入れたことに安堵しながら、彼らにそう伝える。急に現れた彼女に驚いたカルナと少年だが、シヤストルラの言った通りに素直に弓を下ろす。しかし、カルナはその顔に戸惑いの表情を浮かべていた。

「シヤストルラ……か？」

「そうだけれど……。私以外に誰がいるの」

何故か困惑しているカルナ。それはバラモンの少年も同じようで、小さく「えっ」と言っているのが聞こえた。いきなり止めに入ったことに困惑しているのだろうか？……そういえば、視界が何か明るいような気がする。不思議そうに首を傾げている彼女にカルナと少年はこう言った。

「……女、だったのか」

「……女性の方、だったのですね」

「……え？」

カルナの言葉にバツと反射的に頭に手をやるシヤストルラ。被っていたフードがとれており、彼女の素顔が見えている状態になっている。視界が明るかったのは、目を遮っていたフードがとれていたからか……！それに気づいた彼女は急いでフードを被るが、時すでに遅

し。カルナとバラモンの少年にバツチリ顔を見られてしまっていた。太陽の光に照らされて輝く、肩より下の長さの透き通った 灰銀の髪。アーモンドの眼には青蓮の如く青い瞳が収まり、まだ幼さを残した整った顔。肌はこの国には珍しい雪のように白い肌。一度見たら、忘れることができないであろう彼女の姿はどこか凜とした強さを感じる。

今までフードを被っていたせいで、顔をよく見ておらず声で少年だと判断していた二人だが思い返してみると少年にしては高い声だったと今では分かる。要は少年とも少女ともとれる声をしているのだ。(しまった……まさかフードがはずれるとは思いませんでした……どうしよう)

(なるほど、花婿選びの話に興味を示さなかったのはそういうことか)(男性にしては随分と細身だと思っていました)が、まさか女性とは……)

沈黙が、その場を支配する。シャストルラは重い口を開いて、ポツリと言呟く。

「……君らは何も見なかった」

その言葉に、今度はカルナと少年が首を傾げる。心なしか、震えているように見える彼女は珍しく声を張り上げて彼らに伝えた。

「だーかーら、君らは何も見なかった。フードがとれた私の顔なんて見えなかった！いいね?!」

他言無用だよと鬼気迫る様子で言う彼女。その目は神もが怖れるような、鋭い眼差しをしている。それを見た二人はコクコクと黙って頷く。心なしか、顔が青ざめている気がしなくもない。そんな彼らを見てホツとしたような顔をしたシャストルラはカルナに向かって先に行っているように伝える。

「お前は来ないのか?」

「あとから行くよ。ちよつと、その人と話したいし」

「私ですか?」

「そう、君。だから先に行つて……すぐ行くから」

「……ああ、分かった」

少し心配そうにこちらを見るカルナ。チラリと少年に視線を向けてから、中庭を出ていく。彼の背中が見えなくなるまで、それを見届けたシャストルラはくるりと緊張している少年に向き直って、呆れたように言う。

「君、変装とか向いてないと思ったことはない？」

「……何のことでしょう。私にはさっぱり分かりません」

涼しい顔をして、フイと顔を背ける少年。努めて冷静に話している彼だが、内心は焦っていた。

（まさか、私の正体に気づいている……？ いや、しかしこの私の変装が見破られるはずが……!!）

冷や汗を流しながら、どうすればこの修羅場じろばいを切り抜けられるかを必死に考えているが、そんな彼の様子をしげしげと見ていたシャストルラの「うん、やっぱり……」という意味深長な呟きによって、さらに焦ることになった。

「君、いや……。あなたはパーンドウ家の三男、アルジュナ王子ですよね？」

「!!……人、違いではないのでしょうか。私はただのバラモン僧ですよ」

「おもいつきり動揺しているじゃん……」

はあ、と呆れたように溜め息をつくシャストルラ。少年もといアルジュナは必死に平然を取り繕うとしているが、無駄である。彼女はそんな彼に向かって一言、言葉を口にした。

「元氣そうでよかったよ」

彼女にしては珍しく、その仮面の顔には笑みが浮かんでおり、まるで花の蕾が大輪の花を咲かせたかのようなうだ。それを見たアルジュナは、豆鉄砲でも食らったかのような顔をして、思わずこう呟いた。

「そういう表情も、できるのですね」

「うん？何を言っているのか私にはさっぱりなんだけど」

突然、突拍子もないことを言ったアルジュナに対してそう答えるシャストルラ。その顔はまたいつものような、無表情に戻ってしまっている。

「とりあえず、君はアルジュナであつてるよね？」

「……………そうです。しかし何故、分かつたのですか？あのカルナでさえ分からなかつたというのに」

「最初、広間で目があつたとき。何か見覚えがある瞳だなあ、と思つて。あと、君の仕草。バラモンにしては動作が綺麗だし、育ちの良さを感じさせたからかな」

「なるほど」

どうやら彼女は、観察力が優れているらしい。そんなことを思ったアルジュナは、シャストルラを少しばかり恐く感じた。もしかしたら、自分の内面を見破っているのではないか。こんな自分を哀れんでいるのではないか。ザワザワと心の中に不安が渦を巻く。

「どうかした？顔色が悪いけれど」

「っ！いえ、大丈夫です。気にしないでください」

ニツコリと笑つて答えるアルジュナ。大丈夫、きつと彼女にも知られていない。自分のこの気持ちおもひは隠し通さなければならぬのだから。

——たとえば、相手が神であつたとしても。

続々・絢爛なる花婿選び

無事に話を終えたアルジュナとシャストルラは、急いで広間に向かっていた。話終えたあとに気づいたのだが自分たちがいない間に、王族たちとの争いが悪化しているかもしれないと思っただからである。しかし、二人の心配は広間に着いたとき、杞憂だったことを知る。何故ならば……。

「姫はあのバラモンが見事勝ち得たのだから、潔くそれを認めて、無益な争いは止めようじゃないか。このまま続けるのは、得策だと私は思えないからね」

浅黒い肌に、艶やかな黒髪を纏めているヤーダヴァ族の王、クリシュナが王たちを宥めていたからである。彼の言葉に不承不承ふしょうぶしょうながらも武器を納めた王たちは帰国の途についており、口々に自らの不甲斐なさを溢していた。

王たちが完全に去った広間は群衆たちの歓声が響き、人垣ができつつあった。人々が寄ってくる前に、カルナ、シャストルラ、ドウリーヨダナの三人はサツと迅速に壁際に避難したのだが、アルジュナと他の兄弟と思われる二人のバラモンは避難をする前に、人波に吞まれてしまい、もみくちゃにされている。それを見たクリシュナは愉しそうに笑っており、ドウルパダ王はアワアワと右往左往している。

「……人で、吐きそう」

ボソツと、そう呟いたシャストルラ。その顔は真っ青で、死人のような顔をしてる。元々、人混みに慣れていない彼女はあまりの人の多さに、気分が悪くなってしまったのだ。口に手を当てて、何とか耐えているが今にも吐きそうである。

「早く、ここから離れた方が良さそうだな」
「シャストルラ、耐えろ。ここで吐くなよ」

彼らにはすまないが、自分たちはさっさと退散しよう、とドウリーヨダナは彼女の様子を見てそう判断した。心配したカルナが彼女の背中をさすり、「大丈夫か」と声を掛ける。それに対して横に首をふるシャストルラ。なるべく人がいない場所に二人は彼女を誘導し、出口

を目指して歩きはじめた。歩いている間にも、人びとはアルジュナたちがいる広間の中央に押し寄せており、まるで津波のようだ。

シヤストルラを気遣いながら人混みを避け、無事に出口に着いた二人だが、そこには、一人の炎の如く燃えるような赤髪と鋭い黄金の瞳をもった少年が仁王立ちしていた。その精悍な顔立ちは、どこか不機嫌そうである。

「友を迎えに来たのだが……。この騒ぎはなんだ」

「ラクタ……パク……シヤ」

弱々しく、赤髪の少年の名前を呼ぶシヤストルラ。名前を呼ばれた彼は、彼女の様子を見て一瞬、目を見開かせるがすぐに元の鋭い眼差しに戻った。

「無事か、と聞きたいところだが……。その様子では無事ではなさそうだな」

仕方がないなと溜め息をつきながら言った少年はドウリーヨダナたちの方に歩みより、カルナの隣にいたシヤストルラを軽々と横抱きにする。抱えられた彼女はというと、顔をしかめて「いいよ、……自分で歩けるから」と文句を言っていた。

そんな彼らを暖かい目で見守っているカルナ。一方、カルナとは対照的に、俺たちは何を見せられているのだろうかと若干遠い目をしているドウリーヨダナ。しかし、ふとシヤストルラが呼んでいた少年の名前が彼女の友鳥と一緒にだということに気づき、ハツとした様子で言葉を紡いだ。

「ちよつと待て。『ラクタパクシヤ』だど?」

ドウリーヨダナは彼女を抱き抱えている少年をまじまじと見た。大空を掴む巨大な翼や、大地を抉る鋭い鉤爪も、目の前少年にあるはずもなく、どこを見てもただの人間にしか見えない。

その視線に気づいた少年もといラクタパクは、片眉を上げて意外だともでもいうように、ドウリーヨダナの顔を見た。

「己^{おれ}が人の姿をとることが出来ると、友から聞いたことがないのか?」

「初耳だ。少なくとも、彼女はオレたちの前で神のことなど話さない」
「確かに、カルナの言うとおりで。あいつからお前たちに関する話を

聞いたことがない」

ほう、と興味深げに二人の話を聞くラクタパクシャ。なるほど。友が己たちのことを話していないとは、珍しいこともあるのだな。てつきり、話していると思っていたのだが……。疲れきって、いつのまにか寝てしまっているシヤストルラの顔をチラッと見る。

もう少し、二人に話を聞こうと口を開くがピリツと彼の肌を刺す気配が近づいてくるのを察した。ヴィシユヌの化身アヴァターラ独特の研ぎ澄まされた剣のような気配。面倒事が起こりそうだと思ったラクタパクシャはその場で話を切り上げ、さっさと自国に帰るようにカルナとドウリーヨダナを促した。

「己はシヤストルラを連れていくが、御前たちはそのまま自分たちの足で帰ってくれ」

「何故そう急いでいる。何か火急の用でもできたのか？」

「いや、ちよつとな」

カルナの疑問にはつきりとは答えず、そのまま「じゃあな」と言つて帰ってしまったラクタパクシャ。勿論、シヤストルラも一緒だ。嵐のように去つていったラクタパクシャを見ながら、その場に取り残された二人はこんなことを思っていた。

（流石、神鳥というべきか。脱兎のごとく素早い速さで飛び去つていったな）

（そーいや、あいつ。ラクタパクシャは来ないとか言つてしよげていたよな……。気のせいかな？）

遠く空に輝く、炎の煌めきを眺める。やけに長く感じた一日は、もうすぐ終わりを迎えようとしていた。

夕日が照らす黄昏色の空に輝く朱い神秘の翼が、一等星のように瞬きスヴァヤンツアラ花婿選びの終幕を神々に知らせている。

そんななか、やつとのこととで人垣から脱出することができたアルジュナ、ビーマ、ユデイシユテイラの三人はドラウパディーを連れて

家路についていた。

一方、母親のクンティーは中々帰ってこない息子たちを心配して、気が気ではなかった。誰かに正体がばれ、それがドウリーヨダナの耳に入り、彼の手にかかって殺されたのではないか。あるいはラークシヤサに待ち伏せされて酷い目にあっているのではないか。そんな不吉なことが次々と彼女の頭のなかに浮かんでくる。

「こういうときにヴィヤーサがいてくれたら……」

彼らを守ってくれたのに。と呟くが、今ここにいない人物を頼つてもしょうがない。落ち着かなければと自分に言い聞かせるクンティーだが、心は乱れており、始終うろろしていた。

それを見ていたナクラとサハデーヴァは心配して、早く兄たちが帰ってこないかと、しきりに外を眺める。

「母上、ただいま。遅くなつてごめんね？ 素敵なお土産を持ってきたよ」

そこへ元気よく帰還してきた兄弟のうち、年長者のユデイシユティラが入り口から声を掛けた。その声を聞いたナクラとサハデーヴァは飛び出すように彼らを迎えに逝くが、クンティーは人の気も知らないで、何を呑気なことを言っているのかと腹をたてて迎えに出もせず……。

「あら、よかつたわね。お前たちでお分けなさい」

と、入り口から声を掛けてしまった。

それを聞いたビーマは「はっはっはっ」と豪快に笑い、ユデイシユティラとアルジュナは苦笑いをしていた。ビーマの笑い声に何が可笑しいのかと門口に顔を出したクンティーは、目も醒めるような美しい姫を見て、口をあんぐりとさせ、大きな目を更に大きくした。

ユデイシユティラは微笑みながら己の母親にその日の出来事を話して聞かせる。そして、アルジュナにくるりと体を向けて、こう言った。

「さあ、アルジュナ。この姫は君が勝ち取ったものだ。母上の許しを得て結婚するといひ。姫も、姫の父上も喜んで受け入れてくれるだろう」

「いや、それはなりません」

アルジュナは顔を強ばらせてユデイシユテイラに言う。もしや、一人の姫を分けれるはずがないと反論するのかもしれないきや——

「順序として兄上がまず先に結婚するべきです。その次にビーマ、私、次いでナクラ、サハデーヴァというのが正しい在り方でしよう」

至極真面目な顔で、そう言いきった。ここは「着眼点はもつと別のところにあるだろう?!」というツツコミをするべきなのだろうが、悲しきかな。アルジュナ以外の兄弟は誰もそのことにツツコミを入れることはなかった。

「えー……。別に気にしなくてもいいのに、でも、アルジュナがそう言うのだったら、そうだね。」

ユデイシユテイラは暫く沈黙し、兄弟の顔を見たのち、決意したように、やおら口を開いた。

「僕らみんなの妻にしよう!」

そのとたん、全員の顔がぱつと明かるくなった。さすがは兄貴と笑ってユデイシユテイラの背を叩くビーマ。ナラクとサハデーヴァも喜んで兄様と言って、彼に向かって飛び付いている。

——その後、こっそりと後をつけていたクリシユナとバララーマ、そしてドリシユタドウユムナによって、ドウルパダ王が己の娘を勝ち取ったのがパーンドウ兄弟と知り、王は喜んでドラウパデーを五人の兄弟の妻とすることを承諾した。

彼らの結婚式は盛大に行われ、それぞれ五人と五日にわたって結婚式取り行われた。その都度、ドラウパデーは花婿の周りを七度周り、妻となった。

ドウルパダはパーンドウ兄弟に十分な財宝、四頭立ての戦車、象百頭、美しく着飾った侍女たちを与えた。また、ヤーダヴァ族の王クリシユナより、様々な財宝、侍女、象、馬、戦車などが贈られ、ユデイシユテイラは喜んでそれらを受け取る。

こうして、パンチャラーの都で楽しい日々を送ったパーンドウ兄弟とドウルパダ王との盟約は固い基盤の上に築かれることとなったのだ。

4章 少女の受難 海底に潜む竜の悩み事

カーンダヴァの森に繋がっている、深い深い海の底。碧のベールに包まれた王座に鎮座している竜王タクシヤカは、自分の娘ウルピーと息子アシユヴァセーナのことについて悩んでいた。

『どうしたものか……』

はあ、と溜め息をつく。ウルピーは彼のことですわわついているし、アシユヴァセーナは森に居着いて滅多に都に帰ってこない。妻のナーガも同様、地上に居着いているためここにはおらず、ただっ広い玉座の間は随分ともの寂しい雰囲気を漂わせている。

「いきなり引きずり込んだと思ったら……もう溜め息つくの止めたら？ 幸せが逃げるよ？」

悩みに耽っているタクシヤカに、小さな客人が苛ついた口調で刃物の如く鋭い言葉を放つ。

『……そう、言われてもな。これは癖のようなものだ。お前に言われたところで治るようなものではない』

「あ、そう。じゃあ帰っていい？」

『まだ話は終わってないんだが』

困ったような声で、客人——シヤストルラに話しかけるタクシヤカ。彼女の機嫌がすこぶる悪いのは主に自分のせいなのだが、今日ばかりは彼女をここに呼ばずにはいられなかった。

何故なら……

『娘が「私の愛を受け入れてくれ」などと言ってアルジュナ軟禁をしまつてな』

「は？ 軟禁?!」

タシン、タシンと先の紅い尻尾を冷たい床に振り落としながら、衝動的な事を言った彼。アルジュナの軟禁が発覚したのは、つい昨日のことで、いつになく機嫌が良かった娘に何か良いことがあったのかと聞いたところ、ニツコリと笑って『ええ、とっても良いことがあります』

したわ』と答えたらしい。それが気になって、召し使いの蛇に見に行かせたところ、なんと兄たちとの約束で、十二年間の放浪の旅をしているはずのアルジュナが狭い個室に閉じ込められていたのだ。

すぐさま、ウルーパーを呼び出して何故彼があんなところにいるんだと問い詰めたタクシヤカだったが、娘のある一言で彼のガラスのハートは綺麗に粉碎されてしまった。

『父様、しつこいです。年頃の乙女には秘密の一つや二つ、あつたつて良いでしょう』

——それに、互いの同意の上で彼はあそこにいるのです。私が『愛を受け入れて下さい』と言ったところ、彼は『是』と答えたのですから。

ウツトリとした様子で頬をほんのりと赤く染めながらそう言った娘を見て『もう、我の手には負えない』と思つたタクシヤカは、唯一親しいシヤストルラに知恵を借りようと、彼女がよく訪れる湖からここに問答無用で引きずり込んで、今に至る。

「……なるほど。私をここに呼んだ理由は分かつたけれど、私にヤンデレた娘をどうにかしろと言われてもねえ」

軽く頬を掻きながら、そう言つたシヤストルラ。何でこんな面倒くさい事態に巻き込まれなければならないのか。タクシヤカがどうにかできないのだから、自分ができるはずなのにと心の中で文句を言う。

「アルジュナなら余裕で脱出できそうな気がするから大丈夫だと思つよ。……多分」

『小さき者、お前はただ帰りただけだろう』

『バレたか。だって、あのアルジュナだし、早く戻らないとラクタパクシヤに怒られるし……』

『あの鳥のことなど、気にしなくてもよいものを』

ラクタパクシヤの名前を出した途端に、タクシヤカは一気に機嫌が悪くなり、きつとその鋭い翡翠の瞳がシヤストルラを射抜く。只人ならば、恐怖で竦み上がってしまう、恐ろしい目。しかし、それに全く怯むことなく彼女は青の双眸を彼に向けて、言葉を返した。

「気にするよ。だって相棒みたいな存在だし。それに、何の断りもなくここに君が私を連れてきたら、彼が怒り狂うのは目に見えているでしょう」

その言葉に、『うっ』と呻き声を上げるタクシャカ。彼女が言っていることは正論であり、自分の宿敵であるラクタパクシャに対する信頼の厚さが垣間見えたからだ。

そんな彼に、はあーと長い溜め息をつくシヤストルラ。前から思うが、何故ラクタパクシャとタクシャカはこんなにも仲が悪いのだろうか。ナーガ相手ならまだしも、同じ王として仲良くすればいいのに……。

それはともかく
閑話休題

「相談されたからには、ちゃんと考えるけれども。正直言つて、何も思いつかない」

『そこを何とかしてほしいのだが』

「……とりあえず、説得してみるか。それがダメだったら、武力行使で」

『頼む、説得で終わらせてくれ。平和的解決が一番だろう』

物騒なことを言い出したシヤストルラを、タクシャカは必死になつて宥める。娘をどうにかしてほしいと言つたのは他でもない自分だが、話し合い（物理）で解決してほしいというわけではない。そこらへんが、彼女の師パラシユラーマに似てきている。

「なるべく、努力するよ」

ファイと目をそらしながらそう言つた彼女。本当に大丈夫なのだろうか。少し不安になったタクシャカだが、他に頼める存在（ひと）がないので、諦めて無事に彼女が娘を説得できることを祈つた。

太陽が真上に輝き、地上を照らしている昼頃。一羽の神々しい鳥が
大空を羽ばたいていた。

『……友が、いない』

森を旋回し、シヤストルラの姿を探していたラクタパクシヤは、彼女が普段訪れている湖にも姿がないことを知って、内心焦りはじめていた。この時間帯なら、湖の畔に座って動物たちとよく戯れているはずだ。なのに、そこには誰もおらず不気味なほど静まり返っている。『……………？ これは、鱗か？』

よく見ると、湖の畔の近くに蒼銀の硬い鱗が落ちていた。人の姿に成り、拾い上げてみる。それは人の手より大きく、滑らかな肌触りをしており、普通の人の手で触れたら切れてしまいそうなほど鋭く尖っていた。

「まだ、抜けたばかりの鱗だな。少しばかり硬いが曲げられる」

両手で、思いつきり二つ折りをする。すると、その硬い鱗はグニャリと柔らかい粘土のように彼の手によって折り畳められてしまった。そして、それを紙のようにぐしやぐしやに丸めて湖に投げ捨て――

「……………あの、馬鹿竜。我が友を勝手に己おのれの都に連れていったか」

ユラリ、と彼の回りに炎が立ち上る。その黄金の瞳には怒りが浮かんでおり、いつもの沈着冷静な態度はどこかに消え去っていた。

「友を連れていったのには、何かしらの理由があるのだろうか……………」

あの竜には一度、痛い目に遭ってもらわなければな？」

不敵な笑顔で、そう言ったラクタパクシヤ。すぐさま鳥の姿に戻ると高く飛翔し、雷の如く素早い速さで飛び去っていった。

その姿を唯一見ていた太陽神・スーリヤは『青ウトバラい蓮の愛し子も大変だなあ』としみじみとした様子で見っていた。

水底の乙女との鬼ごっこ

「どうして、ナーガ族の女性はこうも執念深いの!？」

「私にそう言われなくても……というか、いい加減降ろして下さい!!」

「無理!」

シヤストルラは、ついさっき救出したばかりのアルジュナを担いでただひたすら、竜と化したウルーパーから逃げるべく、じめじめと湿った道を走っていた。

——事の経緯は、時を遡ること一時間前。

タクシヤカに見送られて、ウルーパーの棲みかにお供の蛇の案内で向かい、たどり着いたシヤストルラは、本人にアルジュナを開放するよう説得を始めたのだが……。

『何故、部外者に口を出さなければならぬのです。早く私の目の前から去ってくれませんか?』

「去るものにも、あなたがアルジュナを地上に帰せばそれで全てが穏便に済むのだけけれど」

『それは無理な話ですね。私はもうアルジュナ様なくしては生きてゆけませんので』

そう言つて、ニコニコと笑うウルーパーにシヤストルラは苛立ちの表情を隠せずにおいた。ご覧のとおり、彼女はなかなか折れてはくれず、何を言つても『彼が是と言ったから』としか答えない。

いい加減、武力行使をしたほうが早いと判断したシヤストルラがついに片刃刀を抜刀し、彼女の喉元に当てる。

「そうか、ならしやうがない。——不本意だけど、強行突破をするしかないね」

『人間ごときが、竜王の娘であるこの私に敵うとでも?——いいでしょう。精々、逃げ惑いなさい』

そう言い放つがいなや、冷ややかな風がウルーパーを包み込み、彼女の本性である竜へと姿を変える。その隙に、シヤストルラは彼女の住処に入り、監禁されていたアルジュナを救出し、その扉の横に置い

てあつた彼の愛用の弓を投げ渡した。

「アルジュナ、久しぶりだね」

「っ！貴女は」

何故ここに、と驚いていた様子で呟くアルジュナ。彼と会つたのは花婿選び以来だが、見ない間に随分と立派な青年になつている。

「説明は後ですよ。今、走れる？」

「走ろうと思えば、走れますが……」

チラリと自分の足を見る彼。よく見ると、彼の足首に真言マントラが刻まれたアंकレットが付けられており、淡い光を放っている。

「あー、なるほど。これは今すぐ解呪できない類いの呪いだね」

恐らく、走ろうとすれば足に激痛が起ころるものだろう。できれば今、解呪したいのだがそんな時間もない。と、なれば残る選択肢は――

「ちよつと失礼するよ」

「は？え、あの、これは？」

「横抱きだけれど？」

「それはわかつています！」

そう、彼を自分が運ぶというものである。シャストルラよりもアルジュナの方が遥かに身長が高いので、いささか不恰好であるが非常事態である今はそんな事を気にしている場合ではない。……例え、男であるアルジュナにとって、大分恥ずかしい構図であろうとも。

「ごめん。我慢して、彼女を振りきるまで」

「……、………クシャトリヤ戦士としてもそうですが、男としても……」

シャストルラは片手で顔を覆い、ブツブツと何かを呟き始めたアルジュナを見て申し訳ない気持ちに襲われた。彼の（プライドの）為にも一刻も早くここから逃げようと、移動を始めたことよつて、彼女の師とはまた違った命の危機を感じる鬼ごつこが開始されたのだつた。

——そして、現在。

『待ちなさい！』

ゴウツと口から水の咆哮を放つウルーパーから、全速力で逃げてい

ラクタパクシヤが口を開いたことで、その場の沈黙が破れた。

『……友は今、どこにいる』

『さあ？どこにいるのだろうな』

彼の問いにクツクツと笑うタクシヤカ。それが気に障ったのか、ラクタパクシヤはギロリとインドラでさえ恐れるその鋭い黄金の瞳を彼に向ける。

『燃やすぞ。この馬鹿竜が』

『馬鹿竜とは、酷い飯草だな。赤い翼ラッタパクシヤを持つ者。我が馬鹿竜だというのならば、さしずめお前は阿保鳥おれといったところか』

『誰が阿保鳥だ。己は御前おまえのような聖仙リシに懲らしめられても懲りずに何度もイヤリングを盗みにいくような馬鹿でもないし、阿保でもない』

『………今のは大分、傷付いたのだが』

『知らん。勝手に傷付いていろ』

辛辣なラクタパクシヤの言葉にグハツと大ダメージを受けたタクシヤカ。彼のライフはもう半数近く削られてしまっている。そんな彼の様子を知ってか知らないでか、さらにラクタパクシヤは彼に畳み掛けた。

『そんな様子だから、ナーガや娘たちが相手にしてくれなくなるのだろう。全く、情けない』

——パキツ

『………、………心が、折れたぞ。今ので』

『良かったな』

『全然良くない……』

その巨大な凶体が纏っている覇気はどこかに消え、小さな蛇がしょんぼりしているような、そんな様子を彷彿とさせる。

それを見て、止めの一撃を言ったラクタパクシヤは、内心やり過ぎたかなと思っていたのだが、すぐに傷心から立ち直ることを知っているのあまり気にしないことにした。

『大分話が脱線したが、友は御前のところにはいないんだな？』

『……ああ、そうだ。今、ウルーパーの説得に行ってもらっている』

『御前の娘の？何故またそんなことを……』

意外そうなに目を見開きながら、ラクタパクシヤはタクシヤカから事情を一通り聞く。最初こそ静かに聞いていた彼だったが、話が進むにつれて、その眉間には皺が寄り苛立ってきていた。

『……御前たちの種族は、本当にろくでもない奴ばかりだな』

『悔しいことに、帰す言葉もない』

はあ、と溜め息をつき呆れたような目でタクシヤカを見るラクタパクシヤ。『仕方がない』と小さく呟き、不意に彼に背中を向けると、何処かへ飛び去ってしまった。

(すまない、シヤストルラ小さき者。やはり我にはあの過保護な鳥を追い返すのは無理だった)

一方、それを見送ったタクシヤカは、今ウルーピーの説得をしているであろうシヤストルラに心の中で密かに謝罪をしていた。

——鬼ごっこが終了するまで、あともう少し。